

に薰ず。これたゞ事と思はぬ所に、これなる松に美しき衣かゝれり。寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候ふ。これは漁夫白良の獨白である。其處へ天女が現れて來て兩者の對話が始まる。

天女「この衣は此方にて候ふ。何しに召され候ふぞ。」

漁夫「これは拾ひたる衣にて候ふほどに取りて歸り候ふよ。」

天女「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき衣にあらず。本の如くに置き給へ。」

漁夫「そも此の衣の御ぬしとは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特にとゞめおき、國の寶となすべきなり、衣を返すことあるまじ。」

天女「悲しやな羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に還らんことも叶ふまじ、さりとては返したび給へ。」

これまでは立派な對話である。然るにその次の

漁夫「この御詞をきくよりも、彌々白良力を得、本よりこの身は心なき、天の羽衣取りかくし、叶ふまじとて立ちのけば」

天女「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、上らんとすれば衣なし」

漁夫「地にまた住めば下界なり」

天女「とやあらん斯くやあらんと悲めど」

漁夫「白良衣を返さねば」

天女「力及ばず」

漁夫「せんかたも」

は對話の趣は少しあるけれども、八九分までは作者の兩者に對する説明叙述である。更にその續きの

地「涙の露の玉鬘、かざしの花もしを／＼と、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。」

天女「天の原、ふりさけ見れば霞たつ、雲路までひて行方しらすも。」

地「住み馴れし空にいつしか行く雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽のなれなれし、聲今さらにはつかなる、雁金のかへり行く、天路をきけばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪、行くかかへるか春風の、空に吹くまでなつかしや。」

は全然作者が天女の心にはいつての抒情詩である。一體地の文章といふのは、抒情詩・叙事詩・叙景詩からまだ全く劇詩に發達しないから存するものであるのに、わが謠曲文學に於ては、こ

の部分に作者の力瘤を入れた重要な場所であり、従つて謠曲の文章として推奨せらるゝ點は、またこの洗鍊せられた抒情的・叙事的・叙景的の文にあるのであるから、謠曲はまだ純粹の劇といふ性質に成り切つて居ないものと云はなければならぬ。

ワキ「さてお事は如何なる人ぞ名を御名のり候へ。」

シテ「恥しながら名を名のり候ふべし。これは出羽の郡司小野の良實が娘、小野の小町が爲れる果にてさむらふなり。」

ワキツレ「いたはしやな小町は、さも古は遊女にて、花のかたち耀き、桂の眉墨青うして、白粉を施さず、羅綾の衣多うして、桂殿の間に餘りしぞかし。」

シテ「歌をよみ詩を作り、

地「醉を勸むる盃は、漢月袖に静なり。まこと優なる有様の、いつそのほどに引きかへて、頭には霜蓬をいたゞき、嬋妍たりし兩鬢も、肌にかじけて墨みだれ、艶々たりし雙蛾も、遠山の色を失ふ。百年に一年足らぬつくもがみ、かゝる思は有明の、影はづかしきわが身かな。」

これは卒都婆小町曲の一部である。對話風になつて居る所も、作者の心を述べた地の文章と見

て差支はない。要するに猿樂が能藝として従来の歌舞二曲を包有して居ると同じ様に、文學としても従来の抒情叙事の文學を保有して居るのである。

謠曲の文章 純粹の劇は總體に於て登場人物の獨白と對話だけから成立つて居るものであるが、謠曲はまだそれまでの形式的發達を遂げて居らないといふことは、前に述べた通りである。その謠曲の實際に就いて見ると、大體謠曲の組織は文と詞との二つから成立つて居る。而してその詞は或僅な場合に、節付をして謠ふことの外、大抵は素聲しこで語るものになつて居る。素聲と云つても、其處に幾分か藝術的修飾の加へらるゝものたるは言ふまでも無いが、まづこの部分は音樂と切離されたものと見ておいてよい。それに對して音曲として運ばれて行く部分は文で、その文はおほよそ抒情と叙景と叙事との性質になつて居ることは、前に引いた例に見る如くである。尤も抒情と云つても叙景と云つても、純粹の主觀又は客觀と判別することは出來ないので、大抵は主觀と客觀との間を往來した様な文體で、叙景・叙事にからんだ抒情、抒情詩に色づけられた風景の描寫・事件の進行と云つた様な性質のものである。つまり従来の今様や宴曲や曲舞の文章のそのまゝに發達したものと云ふ事が出来る。

而して此等の文を成すのには、古歌古文即ち古人の名文句を使用して修飾することが殆ど謠

曲文學の生命であつた。世阿彌が能作書に、「祝言・幽玄・戀・述懷・望憶、色々の縁によるべき詩歌言葉を、能の風體に因りて取りあてがひて書くべし。能には本説の在所あるべし。名所舊蹟の曲所あらば、其所の名歌名句の言葉を取る事、能の破三段の内につめと覺しからん在所に書くべし。これ能の堪用の曲所なるべし。其外、よき言葉名句などをば、爲手の云ふ事に書くべし」と指圖して居る。世阿彌もこの方針を以て能の詞章を作した。爾後の作者も殆どこの主義に依らないものが無かつた位、謠曲文の一特色は確にかくの如くにして成されたものであつた。有名な高砂曲の一文、住吉の神の嚴肅な出現の所に

後シテ「われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松いくよ經ぬらむ。むつまじと君は知らずや

瑞籬の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すゞしめ給へ宮つこたち。

地「西の海、あをきが原の波間より

シテ「あらはれ出でし神松の、春なれやのこんの雪の朝香渦、

地「玉藻刈るなる岸陰の、

シテ「松根によつて腰をすれば、

地「千年の縁手に満てり。

高砂

シテ「梅花を折つて頭にささげば
地「二月の雪衣におつ。

とある文は、皆古典からの借用文句で充されて、殆ど作者の獨創といふものゝ無いことは、次の出典に照してもわかる。

(一)われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよ經ぬらむ(伊勢物語)

(二)むつまじと君は知らずや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき(同上)

(三)西の海やあをきが原の潮路よりあらはれ出でし住吉の神(續古今集)

(四)倚松根而摩腰 千年之翠滿手 折梅花而挿頭 二月之雪落衣(本朝文粹、和漢朗詠集)

これはやゝ極端な例であるが、なほ作によつては、古歌や古句を宛がうても、よくそれを生かして用ゐた例も少くはない。鐵輪といふ曲に、嫉妬深い女が貴船明神に丑時詣をするところ

げにや蜘蛛の家に、荒れたる駒はつなぐとも、二道かくるあだ人を、頼まじとこそ思ひしに、人の僞末知らで、契りそめにし悔しさも、唯我からの心なり。餘り思ふも、苦しさに、貴船の宮に詣でつつ、住むかひもなき同じ世の、内に報を見せ給へと、頼をかけて貴船川、早く歩を運ばん。

鐵輪

は、古歌の

蜘蛛のいへに荒れたる駒はつなぐとも二道かくる人は頼まじ。

とあるのを善用したのである。求塚といふ曲に、後ジテ即ち幽霊が現れ出たところ、

あう曠野人稀なり。我が古墳ならで又何者ぞ。骸を争ふ猛獸は去つて又残る、塚を守る悲魄は松風に飛び、電光朝露猶以て眼にあり。古墳多くは少年の人、生田の名にも似ぬ命、去つて久しき故郷の人の、御法の聲はありがたや。あら閻浮戀しや。

これには白氏文集の句が使用されて居るが、その節附の巧さと相俟つて悽愴の氣分を表すに適當な文句となつて居る。

和歌に本歌取りといふ作法のあることは前に述べた。古歌の有して居る長所を、そつくり自分の歌の中に入れて、自分の歌の飾とし、又は自歌の内容を豊富にするといふやり方である。以上の如き謠曲文が古歌古句を補綴する作法は、全くこの本歌取りと手法を同じうするものである。而して本歌取りの和歌が往々にして失敗に畢つた如くに、謠曲の文もこれが爲に失敗したものが少くない。即ち作者の力が足りないが爲に、利用せんとした古典がむしろ重荷となつて、古典の内容を消化しきれず、例へば風景を叙べるに當つて、春秋の各句を混じたり、

補綴の意

謠曲の題材

朝暮の兩歌を並べたりしたものも無いではない。かく古典を崇拜してその上にはかり憑りかゝらうとし、獨創の尊さといふことを知らなかつたことは、わが近古文學を通じての一通弊であつた。さきに文學的妄信と云つたのは即ちこの性質を含んだものである。謠曲文學の作者も、近古以來の文學者連の陥つて居た妄信から脱却することが出来なかつたが爲に、折角民衆的に發達しかけた猿樂能をして、充分に行く所まで行かせ得なかつたものである。妄信的な傳統崇拜は、猿樂發達の爲には三界の首枷であつたと云へよう。この後を繼いで江戸時代に現れた淨瑠璃文學も、近松門左衛門を作者に得るまでは、やつぱりこの傳統的桎梏を脱却する事が出来なかつた。

謠曲の題材 室町時代の作と認めらるゝ數百番の能を見渡して、その題材の出所由来を調べて見ると、純粹に作者の想像や觀念だけから創作されたものは極めて少く、大多數はいづれも由つて來る處の種を持つて居る。まづ能全體を時代物と世話物との二つに別けて見る。時代物の題材として一に採られたものは史實である。但しこの史實といふのは學問上嚴密な意味からいふのではなくして、作者が歴史上の事實と信じて、その人物を中心とした事件を取扱つたものを指すのである。その典據で一番に多くの題材を供給したものは平家物語である。實盛・通

一、史實

盛・敦盛・忠度・清經・經政・八嶋・頼政・俊寛・小督・大原御幸などはあの物語から材を取つて劇化せられた曲である。次に源氏物語からは夕顔・半菀・野宮・葵上・浮舟・玉葛・住吉詣・落葉・空蟬・須磨源氏などが引出され、伊勢物語からは井筒・杜若・高安・雲林院・小鹽、大和物語からは求塚・采女・姨捨などが作せられて居る。義經記と曾我物語との題材に就いては、前にその條に述べた通りである。次に古史古傳に見えた筋を脚色したものには、大蛇・御崎・養老・難波・守屋・國栖の如きがある。いづれも日本書紀に出て居る事蹟である。

二、縁起

二に史實に次いで多く作曲せられたものは寺社の縁起である。輪藏・右近・賀茂・松尾・放生川・弓八幡・逆矛・龍田・代主・葛城・三輪・布留・志賀・海士・九世戸・大社・和布刈・宮崎・老松・道明寺・氷室などはこれである。

三、傳説

三には古今東西の傳説に因つて作曲したもの。中には小説や歌話に記載されたのに暗示を得て、これに首尾を加へたものもある。例へば泰山府君・吉野天人・羽衣・西王母・枕慈童・一角仙人・大會・善界・狸々・野守・黒塚・舍利・石橋・千引・殺生石の如きはこの類に入れてよからう。

四、主従

次に世話物といふのは、當代の社會の作者の目撃した(と假定し得べき)事件を題材としたものである。その一は主従の關係、特に臣下が主君の跡を慕ひ尋ぬるといふ筋のものである。人

五、親子

生をはかなんで通世するといふことが、當代思想の一反映であつた所から、この種の悲劇的な筋が生じたものである。土車・高野物狂はこの例曲である。その二は親子間の恩愛からして、互に別れた父・母・子が尋ね廻つてめでたくめぐり合ふといふものである。稻舟・木賊・弱法師・花月・隠岐物狂・三井寺・百萬・櫻川・柏崎・飛鳥川・經書堂・丹後物狂などはこの種のものである。なほ有名な隅田川は、母が子を尋ねて、廻りは逢はずしてその亡き跡を弔ふといふ悲哀劇になつて居るので、これは特例である。その三は或る事情の下に別れた夫婦が、機を得て再び相逢ふといふ筋のものである。芦刈・由良物狂・籠太鼓・加茂物狂・斑女・舞車などはこの種に屬する。

六、夫婦

七、雜

なほこの外に、いづれの分類にも入れる事の出来ない、またいづれの出典からとも指摘することのむづかしい多數の曲のあることは勿論である。天仙龍鬼動植などの、印度とも支那とも日本とも所屬を明らかにし得ない性質のものも少からぬが、要するに室町時代に於ける猿樂能は、わが國劇最初のものとして、筋題材に於ては從來の古典文學中の劇化し得らるべきあらゆるもの、當代の事件の劇たるに足るべき趣味多き悉くのものもを攝取して、大小の曲數に仕組んだものであるから、それ自身に於て有意義有價值のものであるばかりでなく、また文學史上を

の内容と形式とを、次の江戸時代の劇或は小説に橋渡したといふ點に於て、非常に値打しなければならぬ。或學者は、謠曲を國文學の倉庫と評して居る。前代の史實・小説・縁起・傳説を收納して、之を後代の淨瑠璃・歌舞伎・小説に供給したといふ點に就いて、その言の妥當であることを認めざるを得ない。

謠曲の種類

謠曲の種類 謠曲題材の出典に關した分類は、おのづから謠曲そのものゝ種類と見ることも出来るが、なほその内容と藝の曲がらとからして、一種の分類法を施して見ることも出来る。即ちその一は祝言物といふのである。さすがにわが國に成立つた能藝であるだけに、藝術を以て御代を祝福するといふことを忘れなかつた。而して國民の信仰に於いては、神と君とは離るべからざるものであり、神は君を護り給ふといふのであるから、君が代のためたさを壽く爲に、神祇を點出するといふのが、此の種の曲の性質である。それ故にこの種を神能とも呼ぶことがある。勿論この神といふのは佛敎的内容を有し、支那風の鬼神の如くに影向出現し、奇特を示して舞つたり働いたりする趣向に用ゐられて居るのであるが、神佛が混淆し妄信が浸染した當代には、別に不思議とも感ぜられず、むしろ藝術的魅力あるものの如くに觀られたものに相違ない。この種に屬するものは

一、祝言物

高砂 玉井 老松 岩船 弓八幡 小鍛冶 國栖 龍田 松尾 編羽

など中々澤山の曲がある。但し宗敎的に似て宗敎的敬虔の念を伴ふのではない。恐らく外國文學にはあまり例の無い趣向であらう。

二、修羅物

二は所謂修羅物と名づけられるもの。能本作者註文にも既に修羅能の名を立て、居る。佛説によるに、生前に瞋・慢・疑の業因ある者は、死して阿修羅道といふに墮生し、其處に於て常に瞋毒を懷き鬪諍に疲れ飢虚に苦み、雲雷にも怖畏し暫らくも安らかな事の出来ない悲痛に、長い長い一生を過さなければならぬと云ふ。その悲痛な性格を主人公として、機縁を以て懐しいこの世に再び姿を現れしめ、生前の華やかにもまた勇壯であつた生活と、今の慘な有様とを對照し、これをば三寶の力で救済して貰ふといふ結の曲柄である。千軍萬馬の間に偉功を奏した義經の靈を再現せしめた八嶋、勢州鈴鹿の鬼神を退治した坂上田村麿を作曲した田村などを始め、

朝長 知章 熊坂 通盛 實盛 敦盛 忠度 頼政 箴 清經
などはこの種に屬して居る。

三、女物

三は女物、女性を主人公とするものである。能本作者註文には女能といふ名を用ゐる。後世の

能樂師の間には鬻物と呼ばれて居る。優にやさしい趣の曲といふ意味から、幽玄といふ名を負ふ場合もある。

松風 江口 采女 小町 東北 野宮 落葉 橋姫 井筒 布留

源氏物語・伊勢物語・大和物語その他の歌話などから出た筋に多くこの種の曲がある。

四、鬼神物

四は鬼神物。この中には紅葉狩・黒塚・羅生門の様な恐ろしい鬼、野守・舍利の様な無害の鬼、鞍馬天狗・葛城天狗・大會・車僧の様な天狗物、及び土蜘蛛・大蛇・殺生石・狸々・鷲の様な超人間的なものが含まれる。

五、現實物

五は現實物。前四類が、たとへ神でも佛でも男でも女でも乃至鬼でも畜類でも、現實の人間界を超越した處の性質を持つて居るのに反し、これは實際の人間社會に存在した、或は存在し得るところの事件を作曲したものである。この中に過去即ち歷史上にあつた事柄を仕組んだ時代物と、現代社會に起つた事件を材料とした世話物との二種が別たれよう。

(イ)時代物

時代物としては有爲轉變の運命を取扱つた景清・千手・俊寛・安宅・攝待・蟬丸の如きがあり、英雄の勇ましい行動を表した烏帽子折・橋辨慶・正尊・錦戸・二度掛の如きがあり、人情にからんだ復讐談には所謂曾我物の外に放下僧・内海・千人斬・大聖寺の如きがある。

(ロ)世話物

又世話物には、戀に狂ふ女夫物、班女・舞車・籠太鼓・加茂物狂・水無月祓の如き、愛別離苦の悲しみに成立つ親子物、隅田川・櫻川・柏崎・百萬・三井寺（以上母の子を尋ぬる筋）、弱法師・木賊・丹後物狂・歌占・花月（以上父の子を尋ぬる筋）、土車・隱岐院・飛鳥川（以上子の親を尋ぬる筋）の如きその主要なものである。

六、雜

六は雜。なほこの外に、いづれの種類に入れるのが適當か曖昧なもの、いづれに入れてもよいもの、いづれの種類にも當嵌らないものなどあるのは勿論である。

演能政策

然るに現今斯道の演伎に際しては、第一に神聖なものとして翁を奏し、その脇に添へる能として祝言物を出し、次に修羅物、次に鬻物、次に現實物、最後に賑やかで勇ましい舞働のある切能と稱する類を出し、總て五番組合せの順序を立て、一日觀能の調和とするのが例になつて居る。これは演能政策上から來た約束で、學術的分類と全然一致するといふわけには行かない。

後世文學との關係

さて以上五種類の中で、後世の歌舞伎・淨瑠璃・小説などに發達して行くべき筋は、多く最後の現實物の中にあつた事を注意しなければならない。この意味に於て現實物の時代物世話物は重要な價値を有するものと云へる。併しながら之を以て直ちに能謠曲の價値と見做すことは出

能謠曲の
眞骨頂の

來ない。何故となれば、能謠曲の特色は現實物によつて發揮せられたものでないからである。能謠曲の眞骨頂は、やつぱり筋としては夢幻的幽霊の出現と、藝としてはその幽霊即ち後ジテをして歌と舞と働とをなさしめる點にあつた。勿論修羅物・女物などの中にも、後世の文學に伸びて行くべき種子を全然有して居らないのではない。併し能の前と後とに於て主人公が替り、幽霊が出現するを一定の型とした仕組は、猿樂の能に於てのみ見る形式であつて、次の時代の文學中には用ゐられずに止んだものである。それだけ、この形式と之に因つて發揮された夢幻的な趣味とは、室町猿樂の特色として尊重しなければならないものである。

宋元の影響 これまでの叙述によつて、猿樂は散樂の系統であり、共に發達した田樂と共に鎌倉の末には能藝を演ずるまでに進歩し、室町に至つては觀世父子の偉才によつて從來のあらゆる歌舞・音曲・文學を集成して、立派な綜合藝術に達し、これを後世に傳へて武家の式樂とならしめた様子が、ほゞ視ひ得られた事と思ふ。所で、最後に考を及ぼして置かなければならぬ重要な問題が、まだ一つ残されてある。それは平安朝末までの滑稽じみた猿樂の所作が、鎌倉を過ぎる間に眞面目な樂劇の性質に變つて來たのは、單に時代的自然の發達にだけ因るものかどうかといふ事である。滑稽洒落の軽いものが、眞面目な重々しいものとなつたに就いては、

猿樂革命
の指導者

寺社の法會や神事の關係から來て居るといふ事は、既にその條に述べて置いた。又單純な所作が歌舞の性質を帶ぶるに至つたのも、歌舞音曲の氣分の濃厚な鎌倉時代の寺社の有様から考へ得られない道理ではなかつた。併しながらそれが一定の舞臺を設け、見所をしつらひ、笛・太鼓・大小鼓に囃され、地と役者とを別ち、總じて首尾の整うた音樂劇を成就するに至つたに就いては、これに指導なり暗示なりを與へたものが無かつたとは、どうして斷言することが出来るようか。

白石の卓
見

新井白石はその俳優考新井白石全集にて、「唐ノ代ニハ傳奇トイヒ、宋ノ代ニ戯曲トイヒ、金ニハ院本雜劇ト云フアリケリ：元人ノ古ニ超エスグレシコトハ只此事ニシクハナシトテ、元曲ト名付テ今モ世ニ傳フル所猶多シ：我國ノ猿樂ノウタヒ物モカノ元曲ニ倣ヒシモノニテ侍ル也」と斷言し、更に之を説明して、「鎌倉ノ代ノ末室町殿御代ノ始ニ當リテ、傳奇雜劇ナド云フコト元朝ニ盛ニ行ハレキ。其代ニハ我國ノ人モ彼國ニ行キ、彼國ノ人モ我國ニ來リ、彼是ユキカヨヒシカバ、彼國ニスル雜劇ヲ我國ノ人見モシ又ハ聞キモ傳ヘシヲ、田樂猿樂ヲ業トセシ輩ヤガテ彼國ノ傳奇ナド云フコトニ倣ヒテ、古ニ有リシコトノ悦ブベク恐ルベク哀ムベク驚クベク喜ブベキコトナドヲ歌ヒモノノ詞ニ作りナシテ歌ヒ舞ヒケルナリ」。「異朝ノ傳奇ト云フコト

ハ、古ハ有リシ奇事ヲ興アル様ニ詞ニ作リナシテ歌ヒ舞ヒシ者也。其戯ヲ成ス者ニ末淨且ナド云フアルハ、コ、ゾ猿樂ニ、シテ・脇・狂言ナド云フ者ニテ、カシコニテハ場ニ上ル始ニ必ズ詩ヲ唱フ。ココニテハ舞臺ニ出ル始ニ次第ナド云フコトヲウタフ。彼ノ賓白ト云フ者ハ、ココニテ詞ト云フモノニ似テ、カシコニテ詞曲ト云フ者ハ、ココニテハサシ・クセナド云フコトニ似タリ。スベテ一部ノ猿樂、彼ノ雜劇ニ異ナラズ」と云つて居る。流石に炯眼な白石の卓見として敬服の至である。然るに一部の文學史家は、深く思をこゝに致さずして、能藝は既にわが國固有の田樂に於て演じられた證據があるから、支那傳來を俟たずして我が國自然の發達と見るのが當を得て居ると考へたり、或は田樂よりも更に以前に、諸大寺の法會に催された呪師に於て劇的の所作が行はれて居たから、國劇の由來をば呪師に歸するのが本當であると説いて居るのを見るが、これは餘りに皮相の見方であると思ふ。劇的の所作と云つても、その所作による事で、劇を成立させて居る種々の要素の性質から研究して見ない事には、考をきめるわけに行くものではない。況して田樂そのものさへ、唐宋の風俗を入れたものと考へらるゝに於いてをやである。今私としては、こゝに白石の卓見を裏書する材料を列記するのが一番適當であらうと信ずる。

宋元否定説

宋文化の輸入時代

一 鎌倉の文化は禪宗を主とした宋の文化であつた事は今更云ふを待たない。榮西も道元も俊仍も聖一國師も、その外に入宋求法したものが非常に多く、南都關係の人にして宋の音曲に通じたといふ僧侶もあつた。寧一山の來朝、饅頭屋の歸化などいづれも有名な話である。新渡の書籍も彌々多くなつて來た様子であるから、どうしてこの間に彼の地流行の戲曲が傳へられなかつたと考へる事が出來ようか。

二 舞臺の構成法が、宋元の傳統である今の支那劇場のものと同様であること。脚本の役割が能樂に酷似して居ること。道具建ての象徴的な程度も餘りによく似寄つて居ること。幕の無いこと。諸曲界第九卷第四號。支那劇と能樂。

三 能舞臺の床下に空甕を埋めて足拍子の反響をよくするといふことは、既に支那劇にもあるといふが、恐らくは支那が日本から學んだのでは無くして、宋元の劇場から我に傳へたものであらう。

四 嘶子特に後ジテの出などに用ゐられる賑盛な合奏は、固有の日本音樂からはどうしても生るべき性質のものではない。舞臺の裝飾や書割の無い劇に於ては、これによつて觀者の心に場面を畫かせる爲に必要な方法であるが、か様な方法は延年舞や曲舞などにあつた様子は認め

嘶子

床下甕

舞臺
役割
道具
幕

二重式の
由來

られない。似寄は支那劇に於てのみ見る所である。

五 更に眼を轉じて猿樂能の内容について考察を下す。能の内容として他の文學に見ることの出来ない特色は何であるかと云へば、第一は劇としての組織が前後二段に別れて、初は現實の人間として現れたものが、やがて姿をかへて幽霊となつて本當の種姓を明すといふ筋になつて居ることである。これを後ジテの形式とも、複式とも二重式とも學者によつて呼ばれて居る。かく過去の勇士なり美人なり或は物の精などいふ者が、普通の人間の形になつて現れ來るといふ思想は、我が國の今までの文學には全く見出せなかつた怪奇な筋で、猿樂能に至つて始めて見るを得た新しい趣向である。幽霊と云へば佛教本來のものゝ如くに考へらるゝかなれども、實はか様な幽霊沙汰は純佛教の思想中には存して居ないものである。尤も幽霊が自分の今居る處は地獄だとか阿修羅道だとかといふ、その地獄や阿修羅といふ場處は、佛教の教に隨つたものであるが、私の云ふ特色とは寧ろその前ジテの出現、即ち彼の世の者が翁嫗男女の姿を此の世に現し出すといふ點を指したのである。八嶋の義經は老漁翁となつて僧に詞をかはし、田村の田村麿は花守の翁となつて名所舊蹟を物語る。此の如きは印度になし日本固有に無し、たゞ支那の鬼神思想中にのみ存して、盛に彼の國の小説戯曲の種となつて居るものである。

國劇に宋
元の影響

以上の諸點を綜合して考ふるに、わが國劇の發達については、宋元の影響を無視する事は出來ないと思ふ。勿論時の自然的發達や藝術家の天才による構造は尠からずあつたに相違ない。けれどもたゞそれのみでは、この立派な藝術は成立し得なかつたものと考へざるを得ない。併しながら之を以て我が國の文化を獨立的の價値なしと落しめるものと取つてはならない。物徂徠はその著南留部志の辨の中に、例の外尊内卑の態度を以て、「能は元の雜劇に擬して作れるなり。元僧の來り教へたるなるべし」と云つて居るまではよろしいが、つゞいて「是ばかりの事も此國の人のみづからつくり出せるわざにてはあらじかし」と評して居るのは餘程間違つた者と云はなければならぬ。抑も何れの國の文化か純粹に獨創と誇稱する事が出来るであらうか。外國の評論はこゝに省くが、わが平安朝の文化とても、印度支那の指導なくしてはかくなかに榮える事が出來なかつたし、その一つの繪畫や彫刻を取つて見ても、異國趣味が加はり來つたによつてかくも國民趣味を豊かに發露する事が出來たのである。わが猿樂の能が宋元の雜劇から誘導せられたからとて、無條件に先進者の精粕を嘗め、徹頭徹尾その眞似をするだけに過ぎなかつたならばこそ、非常の恥辱とも云はなければならぬが、これはある意味に於ては藍より出でて藍よりも青く、支那などの影響は何處にあるかと疑はれるまでに、しつくりと上

品に國民趣味に同化して了つたのであるから、其處に國民文學としての誇を感じて然るべきであらうと思ふ。

第三節 狂言

謠曲と狂言

室町文學中、謠曲について重要なものは狂言である。謠曲が古來からの眞面目な題材を探り、古典的、文句を補綴配列して一種の音樂劇と成つたに對し、これは現代社會にありふれた事件を諷刺的にまた滑稽的に取扱つて一曲となし、これを遣るのにそのまゝの口語を以てしたのであるから、謠曲よりも更に一層、國民詩的の性質を有して居る。

狂言の素地 上古中古の文學などにも輕快な滑稽味のあるものが無いでは無かつた。例へば萬葉集^{卷一}の中の戯歌に、池田朝臣といふが大神朝臣奥守といふ瘦男を嘲つて、

寺々の女餓鬼まうさく大神の男餓鬼賜りてその子うまはむ

といふ歌を詠んだ。男餓鬼とは奥守を指したことは勿論である。すると奥守は池田朝臣の大きい赤鼻を嘲つて

佛つくる眞朱足らずば水たまる池田の阿曾が鼻の上を掘れ

戯歌

と笑ひ返してやつたとある。他人の身體上の缺點を擧げて之を好笑の材料にする如きは、よい事とは云へないが、兎に角に滑稽文學の初期のものといふ點に於て注意に價する。

誹諧歌

古今集の中には誹諧歌といふがある。洒落な滑稽味の歌として六十首足らず收めて居るが、勅選集といふ爲か知らぬ、あまり上品に過ぎて、微笑を覚えしめるが、腹の底からの笑を催さしめる力は無い。むしろそれよりも平安朝中頃以後に弄ばれた神樂歌や催馬樂歌の中に、輕快な國民性を遺憾なく反映したものがあつたを見る。神前に奏する歌の中に滑稽諧謔な歌のあるといふことは、ちよつと腑に落ちない事柄の様にもあるが、其處が我が國民性の樂天的なところだ、神様も自分どもと共に樂み喜んで下さるものと、親みを感じて居たのである。さうしてその歌は民間の風俗歌そのまゝであるから面白い。例へば神樂歌の中の早歌に

神樂歌

や 鷺の首とろんと や いとはた長うて や あかぢり踏むな 尻なる子 や 吾も目はあり 先なる子 や 舍人こんぞ 尻こんぞ や われもこんぞ 尻こんぞ や あちの山脊山 や 脊山のあちの脊 や 近衛の御門に こじ落いつ や 髮の根の なければ

詞の意義を明らかにしてよく味へて見ると、随分笑を禁じ得ないものがあるのである。けれども此等是一篇の歌謠たるに止つて、まだ大仕掛な滑稽文學とは云ふ事が出来ない。言はゞ喜劇

狂言の起
源

と稱せらるべき狂言の發現について、たゞその素地を成すといふに止るべきものと思ふ。なせなれば、か様な軽い心持が即ち狂言を生み出したものであるからである。

狂言の起源 狂言の起源は明確にし難いが、平安朝の中頃以後、藤原明衡の新猿樂記などに見る滑稽な物真似所作から進化したものであらうといふ事は、凡その學者の一致する所である。然らば、猿樂の能もこの平安朝の新猿樂等から系統を引いて居るのに、狂言もまた同じ系統から出て居るといふ、その關係はどうなつて居るのかといふ疑問が起らざるを得ない。それは斯うである。中古の猿樂が滑稽な所作を爲して人の頤を解くといふ性質のものであつたのに近古以後の種々の事情が、能藝をして歌舞音曲化せしめ、内容も宗教的に眞面目なものと轉化して行つたので、本来の新猿樂の發揮した滑稽味は、猿樂師の一部に取残さるゝに至り、それが別に形を執つて狂言と名の付くものに成つたと考へらるゝことである。これを裏書するものは、一前期猿樂の發達しかけて來た滑稽劇的の性質は、樂天性を有する國民の藝術中に消え失せて仕舞ふべき筈の無いこと。二後期猿樂の能の演奏中に、この滑稽な所作がヲカシと云ふ一役として取入れられて居るが、それは後世の能では狂言師の役目であることが、兩者の關係を物語つて居ると認むべきこと。三狂言師の古典的殊藝として居る風流といふものは、從來は

たゞ滑稽な所作を藝とした猿樂師等が、自分共の藝を豊富にしようとの要求などから、世間に行はれて居る色々の歌舞拍子物を取入れて、やがて樂劇に發達すべき過渡の状態を示して居るものだといふことなどである。

此等の理由から考へ合せて、狂言は中古の所謂新猿樂から出でて、その滑稽味を發達させたものであると云ふ從來の説は、肯定せられて然るべきものと信ずる。

狂言の語義 狂言といふ語は勿論支那から用ゐられて居たものである。支那ではこれを、筋道の立たない言語の意味に使つて居た様である。狂の字は論語にも不直と云ふ様な意味に用ゐて居るから、自然さ様な語義となるわけであらう。用例を擧げると、獨孤及の詩に、「古人邀盡醉林鳥助狂言」、韋應物の詩には、「飲酒任眞性、揮筆肆狂言」、杜牧の詩には、「勿發狂言驚滿座」、兩行紅粉一時廻」などある。これがわが國に入つて通用語となるに至つたのは、白樂天の文に因る處が多いと推せられる。即ちその文とは、「願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤、翻爲當來世々讚佛乘之因轉法輪之緣」と云ふのである。これが和漢朗詠集の中にも採られてあり、平家物語流布本卷九教盛最後の事の中にもこの文によつた文句が出て居るほどであるから、鎌倉時代に入つては餘程普通な語となつて居たことが知られる。かくて狂言てふ語が元の猿

語義

樂の本質を傳へた滑稽劇の一稱となるに至つたわけである。

然るに或學者は古今著聞集の「興言利口者、放遊得境之時、談話成虚言、當座殊有取笑驚耳者也」とある處の興言の音から來たものでは無からうかと考へても居るが、私は却つて興言は狂言から誤り轉じたものと思ふ。漢文には興言といふ熟語は無い様である。

初期の狂言

初期の狂言 我が喜劇に對して狂言といふ名の用ゐられた最初は何時からかわからない。それが世阿彌の時分には、もう一座の中に狂言師といふ特藝の者がなくてはならないまでに必要なものとなつて居た様である。習道書。申樂談儀。またその狂言師の上手に、先輩には槌太夫・新座の菊、同輩には後の槌太夫と云ふが居た事も見えて居る。申樂。後日記。それから少しく下つて永享五年、音阿が勸進猿樂を興行した時分には、彌六・彌七といふ狂言師の居た事が見え、その十餘年後に當る文安三年には、田樂法師の中にも、能藝と共に狂言をも演じたといふ松阿・一阿・徳阿などの名が見えて居る。文安田樂能記。けれどもこれまではまだ狂言の曲目が見えて居らない。その曲目の初めて見えたのはそれより約廿年の後に當る寛正五年紀河原勸進猿樂能の際に於てである。

類從三六三、紀河原勸進猿樂能記。

三の丸長者 猿引 隱蓑 鉢叩 懷中 八幡之前 髯垣楯 蚊 大か小か 鬼の豆 伊文

字 磁石 三本柱 曆 朝比奈 茶麩座頭 腹鼓 若和布 入間川 馬太刀 見る聲 傘
の秀句 わらうち 餅喰

の廿四曲で、其の中に現存のものは側に圈點を施した十八番である。寛正年間は東山將軍義政の盛時で、謠曲能の方は殆ど圓熟の境に入つた時代であるが、之と雁行して狂言も段々に作出されて來た様に見受けられる。まづ以上の諸曲は狂言中でも初期のものと認めておいてよからうと思ふ。

狂言作者

狂言の作者に就いては、猿樂傳記燕石十種一。温知叢書八。に、「狂言師の發り詳ならず云々。其をかしみを勤る者狂言師というて、能の内の答を仕り、中入の時、間の延引の處を結ぶ。是ばかりにしては見だてなしと、今の狂言を仕はじめ、物好に付、玄惠法印狂言の詞を百六十番作りつゝせたりと云々」と見えて居る。續視聽草の散樂人由緒書古事類苑樂部一五には、玄惠法印作の狂言作を五十九番、金春四郎次郎宇治彌太郎二代の内の作として七十八番、作者不相知として二十三番、合せて百六十番を載せて居るが、この百六十番といふ數が兩傳相一致して居る點も妙である。

玄惠

この玄惠法印一九二九—二〇一〇といふのは、後醍醐天皇の時代の叡山の學匠で、程朱の學にも

通じ、建武式目の撰にも預り、足利尊氏にも歸依せられ、太平記もこの人の筆だとさへ傳へられた位に、文學に縁の淺からぬ才人であつたから、狂言作の事も全然虚傳だと言ひ去ることは出来ない。或は何等か據處のあつての事かも知れないが、それは今より詳らかでない。次に金春四郎次郎といふのは、猿樂能の方で既述した金春禪竹の末子で、狂言大藏流の祖と稱せられた人である。宇治彌太郎と云ふのはまたその孫弟子に當る人で、この人々の間に多數の作が出されたといふのであるが、何曲が誰の作といふ事はわからない。

以上の所傳は果して正確であるか否かは保證し得ないが、さりとて反證の無い限り無暗に先人の記録を否定し去ることも出来ない。但し狂言は能よりも著しく民衆的性質を帯びて居るのであるから、作者の誰とも名宣らすしてはつり／＼と試作されたものも澤山にあつたものと思ふ。或は狂言師の常意即妙に演じ出したのもあつたに違ひあるまい。その内容を見ても同一作者の手に成つたもので無いと認めらるゝ點が明らかにある。又徳川時代に入つては、貴人の註文に應じて時の狂言師の創作して演じた物大藏流家童子もあつた様である。此等の意味からして私は、狂言作者を誰々と少數文學者の中に限定せずに、その時代々々の狂言師を通じて民衆全體が創作したものと観るが穩當であると思ふ。

狂言の流

狂言の流派 猿樂能の大成期たる世阿彌の時分に、榎太夫や菊などいふ狂言師のあつたことは前に述べた。もう少し下つて寛正五年紀河原勸進能の時には、三日に渡つて廿四番もの狂言が演じられたにも拘らず、狂言師の名の見えて居るのは、兎太夫うさぎと三郎太郎だけで他の名は出て居ない。多分その弟子や末輩も居つたに違ひないが、まだ公の名題に上るまでに位が付かなかつたものであらう。文安の田樂能には松阿・一阿・徳阿などいふ名が見えて居るが、曲目も出て居らねばその演じた様子もわからない。恐らくはまだ専門の狂言師でなかつたか、或は専門となつてもまだ餘り盛なもので無かつたのだらう。

それが段々に狂言のもてはやさるゝに連れて、この伎専門の役者も増し、演奏の度数も多く、世間の人氣も引立ち、従つてその伎を磨き藝風を高める事にもなり、藝が上ればまた貴人なり民衆なりの要求も加はり、作曲も多くなるに至るといふので、兩々相待つて狂言道の隆昌を來したわけである。併し狂言師に流派を生じ、正本を異にし藝風にも特色を生ずる様になつたのは、徳川時代に封祿を食む事となつてからの事であらう。その流派は大藏・鶯・和泉の三である。いづれも元祖としては玄惠法印を立て、居る。

大藏流 江州坂本の住人日吉彌兵衛といふ者、玄惠より傳授したのが始といふ。これは恐ら

鶯流

くは日吉三座の中の系統に属した人であらう。六傳して金春四郎次郎、次に萬五郎、次に彌太郎。この彌太郎の時に大藏と稱し太夫號を許されたといふ事になつて居る。續觀聽章

鶯流 戰國時代に長命次郎太夫といふ狂言の上手があつた。生れ付き頸が長いので異名を鶯と云はれたのだといふ。磯遊 笑覽一説には豊太閤名護屋陣の時、長命權之丞といふ者が川へ飛び込

んで鶯が泥鰌を踏む真似を面白く演じて見せたので、この名を得たのだとも云ふ。猿樂 傳記

和泉流

和泉流 江州坂本に丘樂軒といふ隱者があつて、狂言の道に通じ、五傳して鳥飼元光と云ふに至り、これが山脇和泉守と號して尾州の徳川家に仕へてからこの流名が生じたと云ふととである。同家系圖 由緒書

風流

風流 廣い意味に於て、狂言には三種ある。一は風流といふもの、二は間狂言、三は狂言本體である。風流と云ふのは、下學集に「風情義也、日本俗呼三拍子物曰風流」と解説してある如く、拍子に懸つて舞ひ踊る翫物の稱である。延年舞の内にも大風流・小風流などの曲物があつた。猿樂道に於ける風流は主として狂言師の手に演じられたものである。内容は平安朝の所謂新猿樂から、室町の純樂劇に發達すべき過渡期の藝として、滑稽味を帯びた拍子物といふ性質を持つたものである。若し私の考をして正しとするならば、かの神聖視せられて居る翁の

式、能樂の故郷として尊敬せられて居る翁・千歳・三番叟の曲といふものは、この風流の一種である。

今日風流の曲の残されて居るものは卅五番ほどある。和泉流狂言六義本に載せた風流の目次には

千々ノ尉風流

蟻風流 あなせ一人

三盤風流

鶴龜風流 鶴龜精二人 面、鼻引ヲ用ユ

仙鶴風流

御賀松風流 松精一人 老松精一人 子五人

蒼頡風流

ソウケツ 文ノ精ヲ連テ出 三番叟鈴ノ段連舞スル

大黒風流

大黒一人 鼠ノ精ヲ連テ出 鈴ノ段 連舞

餅風流

餅一人 仙人頭一人 仙三人 地五人或ハ六人

毘沙門風流

毘沙門出テ 鈴ノ段ヲ舞

松竹風流

松ト竹ト精二人出

四季神風流

地神 春夏秋冬ノ神合テ四人

第五篇 室町幕府の世——第六章 劇

松龜風流

壽福風流

青龍池風流

春神風流

鳳凰風流

春日風流 仕手春日明神

ツレ鹿

寶の風流 紗巾袋一人

寶珠一人

蘆橋風流 仕手天神一人

批把一人

構一人

仙人風流

仕手壺公一人 彭祖一人
費長房一人 酌五人
仕手三番叟鈴ノ段連舞

の廿一番を擧げて居る、この外になほ火打袋・犀之神・布留・八幡・西王母・如意寶珠・福神・住吉・布引・相生・根延・七夕・三角・吉などいふ名も見える。内容は目次の小書に示すが如く幼稚な滑稽風の所作を主としたものであるが、文章に何等の洗煉なく、文學としての價値を有するものではない。たゞ眞面目なるべき方面が能樂に發達し、滑稽な方面が狂言として發達して行くといふその過渡期の藝風を示すものとして、史的に重要な意味を持つて居るだけである。今日の舞臺に於ては殆ど演せらるゝことが無いものだといふ。

間狂言

間狂言 間狂言と云ふのは、猿樂能演奏の場合に於て、嚴肅な能藝に對照を持つた滑稽味の

ある軽い言動を以て、一種の役目を果す狂言のことである。これにまた凡そ三種を立て得ると思ふ。一つは能の役者として——たとひ端役であつても——舞臺上の一員として筋にかゝりのある性質のもので、これが無ければ大なり小なりの穴のあくといふ關係のものである。も一つは能の筋を平たい口語で繰返して、見物に解り易からしめようとする爲の狂言役である。世阿彌の十六部集習道書に「狂言の役人の事、是又をかしの手だて云々。又信の能のみちやりをなす事、笑はせんと思ふあてがひは、まづあるべからず」とあるのは恐らくこの意味の者を指したのであらう。道遣りとは、能の文句が古典的であり、史實や故事が普く學知せられてない時代のことであるから、能の筋は可なりに一般の人には難解であつたに相違ない。それ故にその史實や故事を、口譯して一般に納得の行く様にするのが必要であつたものと見える。

三つには、二場以上の仕組になつて居る能に、幕といふものが無いから、その兩場の時間つなぎとして使用せらるゝ間狂言である。これには單純な道遣り、即ち語かたりだけで済されるものもあるが、その中には之に趣向をこらして目先を替へた仕組のものもある。換言すれば、能の演技とは可なり離れ得べき性質でもあり、時間も餘裕のあること故、狂言特有の味を此處に發揮する可能性があるので、色々の面白いものがこゝに作出せられたものと見える。この種の狂言

で文學的價値のあるものは、氷室・大社・千引・橋辨慶・夜討曾我・雲雀山・國栖・烏帽子折・黒塚・道成寺などの能に用ゐらるゝもの、及び普通の間狂言のあるのを一段と變化せしめたもの——替の間かへのまといふ——例へば御田おんだの問鉢叩のんぼくたたの問猿聲のんさるこゑの問道者のんみちしや白鹿しらしか及び江島えじまの間などである。

各曲によつて長短はあるが、いづれも二人以上の狂言役者を要し、中には首尾を整へてそのまゝ喜劇の形になつたものもある。それ故に能から引離してそれだけを演じて狂言の用をなすので、例へば夜討曾我の大藤内、賀茂の御田、輪藏の猿聲などは或場合には獨立狂言の中に入れられる。

間狂言數

然らば此等の間狂言の數はどの位あるかと云ふに、和泉流名寄一覽によると、初傳五十五曲、中傳二十七曲、奥傳二十二曲、一子相傳五曲、通計して百九曲を擧げて居る。(但しこの次第は藝としての難易から立てたもので必ずしも文學としての標準にはなつて居らない)。大藏流の書拔に従へば凡そ二百十一曲諸曲界二十二卷三號四、間狂言の役柄分類どの名が見えて居るが、なほこの外に四五曲はある様だから、間狂言の總數はまづ二百五十六曲として大差はあるまいと思ふ。

文例

夜討曾我

ナモ 大藤内 アド 夜廻の男

シテ中入 早鼓にて出る

ナモ「ア、悲しや、真平助けてくれい、斬らるゝは、出合へ、悲し

や。ワキ座のりたアド「是はいかなこと、何とした事でござる。扱々氣毒な體ぢや。申し何となされたぞなど云ひて追付いて出で。申し、是はまづ何とした事でござる。ナモ「ア、眞平命を助けてくれい。アド「是はいかな事私でござるが、何となされました。ナモ「何、私ぢや。アド「中々。ナモ「私と云ふは誰ぢや。アド「私でござるが何となされてござるぞ。ナモ「エイそなたか。アド「是はまづ何とした事でござる。ナモ「今胸のたくめきを直してから咄いて聞さう。アド「それは彌々心掛りでござる。いか様な事でござる。ナモ「そなたも御知りやる通り、かの曾我兄弟の者よ。アド「曾我兄弟の者が何と致してござるぞ。ナモ「されば其事ぢや。彼等が父河津の三郎は赤澤山の狩くらにて、尾越しの矢に當つて空しうなられたを、祐經殿の業ぢやと云うて明暮附けねらふと云ふに仍て、祐經殿も常々油斷はなされなんだ。アド「ホウ。ナモ「夫ぢやに依て此狩場でも、夜な、寝間をかへられた。所で某がいふは彼等兄弟の分として方々を附けねらふ事、蟻螂が斧を持つて龍車に向ふが如く、たとへ又忍び入りたればとて、此の大藤内が御側に居ては、中々彼等に指でもさゝする事ではござらぬ。御心強う思召せなどと云うたれば、祐經殿も殊の外悦ばれて、扱々そなたは頼もしい人ぢやと云うて、某をば片時も側を放されなんだ。アド「ホウ。ナモ「イヤまた某も、よもやか様な事はあるまいと思つて伽

をして居たが、何者が手引したやら彼等兄弟の者が、今宵狩場へ忍び入つての。アド「南無三寶、して何と致しました。チモ」流石河津の子供等ぢや。寝入られた所を討つてはと思つて、あゆみの板をどうくんと踏みならし、いかに祐經、敵持つ身が枕を高う寝る物かな。起上つて勝負せよというたれば、祐經殿も心得たりと云うて起き上らせらるゝ所を、兄の十郎がばつたりと斬付くると、弟の五郎がばつたりくく泣。昨日までも今日までも一藤別當工藤左衛門祐經と云はれた人が、どこが天窓あたまやら手やら足やら、なますの様に斬つて仕舞うた泣。

アド「やれくゝ夫は近頃痛はしい事でござる。其時こなたは出合はせられぬか。チモ」某も日頃目を掛けてくれるゝは、此様な時の爲ぢやと思つて、其儘起上り枕元の太刀を追取つて、アド「イヤ申し、夫は何でござる。チモ」ムウ是は宵に吹いた尺八ぢや。アド「是はいかな事。刀と尺八と取違ひさせらるゝといふ事があるものでござるぞ。チモ」イヤ是々さう仰しやるな。あの場に及うで刀やら尺八やら何と見分けて居らるゝ物ぢや。アド「是はいかな事。チモ」さりながら身共も大事の詞をつがうた。アド「夫は何と詞をうがはせられた。チモ」今宵の夜討は曾我兄弟の者なり、後日に争ひ給ふな。その證據には吉備津の宮の神主大藤内是にありやくゝと、アド「高らかに仰せられたでござらう。チモ」名のると思つたばかりで、何とも云はずに逃

げて來た。アド「日頃の口程にもない、其様な事があるものでござるか。チモ」大童の體で斬つて廻るによつて、今斬らるゝかもう斬らるゝかと思つて、漸々逃げ延びた事でおぢやる。

アド「是はいかな事、近頃むさとした御方でござる。扱こなたは餘り取亂された體でござるによつて、まづ帯をなされたならば能うござりませう。チモ」某は手がふるうて帯がならぬ。わ御察帯をしてくれさしめ。アド「夫ならば私がしめて進ませませう。是へおこさせられい。チモ」心得た。今宵は能うこそ其方來ておくれやつて、近頃満足致す。アド「私も狩場の夜廻りを仰せ付けられてござるが、いかにも取亂させられてござるによつて、何事かと存じ、夫故參つてござる。チモ」近頃忝うござる。借何と能うおりやるか。アド「一段と能うござる。下略。

獨立狂言

狂言本體 世間で狂言と稱するのは即ち三種狂言の中の第三たる狂言本體のことである。狹

義に於ける狂言、能樂から獨立して居る狂言である。演能の際に能と能との間に狂言が挿入して演ぜらるゝのでこれを間狂言といふのだと誤つた學者もある。

狂言の眞の價値はこの獨立狂言の上にあるのであるから、その内容形式に就いて委しく解説を試みなければならぬ。

人生と笑

狂言の趣味 人生には笑といふものが無ければならぬ。笑が肺臟の一運動であるが様に、吾々の精神の沈滞に對しても一つの刺戟となるものである。人間の社會は一面に合理的に成立

つて居るが、その他面には不合理な矛盾した所もあるものである。その合理的な事ばかりで進めば人生といふものは倦怠至極なものである。同じ分量の呼吸ばかりして居ては、肺の運動に新鮮な活が入らない。人生の不合理・矛盾から發した笑によつて人間社會に活氣が生じ、人生の味といふものが隅々まで行きわたる。笑は實に人生にとつて精神的の活と云つてよい。わが國民の由來樂天的にして笑に長じて居たのが、國家を興隆せしめた所以の一つであり、かの印度の、冥想厭世の氣に充ちて笑といふものゝなかつたのが、亡國の非境を招いた所以であつたかも知れない。

笑の種類

それは兎もあれ、笑の原始的なるものは、身體に交渉を有するものである。その最も低級なものは局部のこそぐりから起る。次には身體の局部を話題とした猥褻な言語から催される。次には身體の不具者を見るによつてこの感を生ずることもある。此等はまた文學の域に入らない、むしろ不道德な性質のものに屬する。次には言語の遊戯、次に所作の誇張、最後に思想の矛盾といふ順序になる。ショウベンハウエルは「抽象的思想と實際的事實、概念と實體、の矛盾が滑稽を生ずる」と云つて居るのは此の點を指したものと云つてよい。此等を取扱つた所に滑稽文學が生じ、これを劇化して狂言が生れたのである。

不具

今實際について狂言の趣味を檢するに、流石に局部の猥褻に關したものの無いのがよい。

——舊猿樂にはそれのあつた事を述べておいた——然るに身體の不具なものを取扱つたものは中々にある。吃・どぶかちり・何々座頭といふ物の如き、また顔の醜さを以て笑の種としたものの如きこれに屬する。

語路

次に言語の遊戯には、語路と秀句との二様がある。語路とは語路合せの略で、地口と云ひ口合ひと云ふもほぼ同じである。人のよく知つて居る文句に、語の響きの類似した文句を並べて一語に兩意を含ましむる戯であるが、狂言では名歌や名文や經文などを機智を以て俗意の語に言ひ替へ、嚴肅なものを下卑たものに取扱ふ所に滑稽味を感せしむる弄びである。榮螺・歌相撲・魚説法、それから宗論の中などにこの例を見ることが出来る。但しこれらは思想上の深みの無いもので、文學として價值の低いものであることは言ふまでもない。秀句といふのは、すぐれて面白い文句といふ意。一語にして二義を有する句を、巧なる機會に使用するをいふので、近古時代に盛にもてはやされたものである。江戸時代から現代に及んで弄ばるゝ洒落といふに當る。薩摩守忠度を船賃なしの只乗り、に言ひ掛ける如き例である。竹生嶋詣には、龍と犬と猿と蛙と蛇とが會合した際に、龍は用事があるから、つと云ひ、犬は去ぬると云ひ、猿はさると云

秀句

ひ、蛙はかへると云つたが、蛇の文句が出来なかつたと云ふ様な事を作してある。畢竟同音語な處に使用した面白味の外に、内容上には何等味ふべきものを持つものではない。

誇張

所作の誇張はあらゆる狂言に用ゐられないものは無いが、特に些細なものを誇張して表すによつてまづ可笑しい例は、蚊相撲に、蚊の精と大名とが角力する筋や、蜘蛛人には蜘蛛の巣にかゝつてもだもだして居る盗人を出した如き、或は吸付き膏藥の効能で天上に飛び上つた悍馬を吸ひ下したと陳する膏藥煉の如きはこの例である。

頓降

最後に思想の矛盾といふのは、これは複雑なだけに色々形を替へて表されて居る。その一つは事物の極端な變化をねらつたものである。修辭法に謂ふ所の頓降で、合理的にはさ様な經過は起り得べからざる所を、急轉直下的に上の者がどかりと下り、偉かつたものがかにも意氣地のないものとなるといふ可笑味を材としたものである。例へば胸突といふに、借金の催促に來た八兵衛が、債務者の七兵衛をつかまへて散々に油を搾る。その末に小突き廻して七兵衛を打倒す事となる、其處で七兵衛があばら骨を打折られたとて人殺しと叫ぶ。八兵衛驚いて詫びるが聽入れない。利息をまけるから堪忍して呉れと云つても承知しない。とうとう證文

を卷いて印形の所を破らせられて、やうやう納得になつたかと思ふと、今度は七兵衛が笠にかり、借金が済んで傷は直つたが、胸の骨を折られたとあつては男の一分が立たぬ、是非に八兵衛の胸骨をも折返さねば済まされぬと威張る。八兵衛ほうほうの體にて遁げ歸るといふ様な筋である。

顛倒

又事物の顛倒にも滑稽味は生ずる。概念として然るべき筈の者が實體に於てその反對になつて居るのは矛盾の一現象である。男尊女卑の武家時代に、女房に小突かれて亭主の參つて居る様子は滑稽の筋となるに充分である。威嚴あるべき大名が實は無識で無風流で而も虚榮心の強いに反し、劣弱な筈の太郎冠者が却つて心得のある如き、驗徳のありさうな山伏にして少しも祈が利かないのに、見すばらしい乞食坊主の中々に甘い事をやる如き、恐ろしい雷神が畑に落ちて腰を抜かして居るのを、恐ろしがるべき人間が之をからかふ如きもこの類である。

對照

尋常の對照といふものは人生にはあり内の事であるが、あまりに極端な對照といふ事は、やつぱり矛盾の一種である。宗論では頑固な法華坊主と淨土坊主とを道連れとせしめ、鹿狩では精進の僧と殺生の獵師とを組合せ、魚説法では生臭い魚の名で説經の文句とすること、鬼の養子ではいかつい鬼にいたいけな乳兒を取合するなどの例である。あり得べからざる不合理を平

失敗

氣で取扱ふ所に可笑味が生ずるのである。

もう一つ有力な筋としては、不注意の失敗といふことがある。これを筋としたものは中々に澤山ある。例へば伯母酒では、吝嗇な酒屋の伯母を、酒甕の鬼に扮して威した甥が、酒をたらく飲んだ酔の末に、伯母の膝を枕に寝てとうとう見あらはされる如き、墨塗では、水入れの水を密に顔に付けて泣いた真似をして居る女が、太郎冠者がその水入れと墨とを取替へたのを知らずに、とうとう顔を真黒にして計畫の失敗した如き、三人片輪では、片輪の真似をして主人に召抱へられた三人の者が、主人の留守居中に本音を出して居る處を見付けられ、すつかり露見に及ぶ如きはこれである。

以上數へた様な滑稽趣味の主要條件をば、狂言作者は各曲に一つづつ取入れて仕組んだのかと云ふに、決してさうではない。むしろ此等の二三を程よく取合せて一曲を成したといふ方が當つて居る。前例に出した伯母酒でも、結局は失敗して「遣るまいぞ」と追ひかけらるゝ可笑味に落ちて行くのだが、まづ吝嗇な伯母と放埒な甥とは對照の妙であり、鬼の面づれで女の脅さるゝといふのは、その所作と共に事實の誇張であつて、それだけでも可笑味はある。それに今までは伯母の前に頭の上らなかつた甥が、鬼に化けて威張るのは頓降であり、その鬼が

忽ち露見して「免さつしやれい」と遁げ、小さくなつて居た伯母が「やるまいぞ」と追驅くるのも同じく頓降である。かくの如くにして一曲にも多くの滑稽條件を含め、之を演出する役者の所作にも、言語にも、相當な滑稽的用意を具へて當代の民衆に喜ばれる様に仕組んだものであつた。

狂言の題材 か様な滑稽な趣味をば如何なる題材の上に求めたかといふに、まづ狂言の筋の史的事實から來たと認めらるべきものは一つも無い様である。これは史實は滑稽化するには餘りに嚴肅過ぎるが爲であつたらう。次に古文學古物語の筋を喜劇化したと認むべき跡も鮮いかの様に思はれる。これも謠曲と性質を異にして居る點である。然らばどんな方面に材料が求められたかといふに、一つは古今の傳説・童話、も一つは當代社會の種々相にあつた。古來の傳説や童話を記したものは、日本靈異記・今昔物語・宇治拾遺物語・古今著聞集などがある。狂言の筋の此等から出て居るものは澤山にある。また當代の俗間に話されて居た童話や傳説の劇化されたものも少くない様である。

それから室町時代の不健全な社會の種々相の中に、不合理矛盾の見出された點を、更に誇張して面白可笑しく仕組んだものは非常に多くあるが、それは狂言の種類を叙述する中に於て、

題材

傳説
童話

社會相

種類

自ら明らかになるからこゝには略する。

狂言の種類 狂言の種類を辨別するには、色々の見方があるが、その一法として暫く斯道に用ゐられて居る見解に随つて見ると、

一は脇狂言、これは謡曲の脇能と同じ様に、めでたい祝言の性質の曲である。必ずしも喜劇の内容を備へて居らないが、これを演出するのに滑稽な所作・言語を以てするので、まづ狂言の内に入るべきほどのものである。

大黒連歌 夷大黒 連歌毘沙門 福の神 寶の笠
などはこれに屬する。

二は百姓物、これも祝言の意味の勝つたもので、農本の國情がこの中に表れて居る。之に屬するものは

筒竹筒 三人長者 松囃子 筑紫奥 松樫 雁雁金 勝栗 三人夫
佐渡狐 などである。

大名物

三は大名物、室町時代の大名は、威張りはしても上品な修養には缺けて居つた。その弱點を

百姓物

舞物

捕へて彼等の位置に對する矛盾を描いたのがこの種の狂言である。これに入るべき例は

末廣 三本柱 栗田口 雁大名 萩大名 靱猿 文相撲 人馬 入間川
累塗

四は舞物、舞入といふことは人生の嚴肅な事の一つであるが、嚴肅だけに常軌を取りはづせば極めて滑稽なものとなる。當代の風習に随つてこの際に演せらるゝ可笑味を取扱つたものはこの種のものである。その例は、

折紙舞 船渡舞 水掛舞 音曲舞 庖丁舞 樽舞 鶏舞 猿舞 斯好舞
八幡前

坊主物

五は坊主物、中古以來の社會に勢力のあつた僧侶は、宗教的に尊敬すべきものゝ澤山にある代り、また一面には随分と弱點をも曝露して居たものである。その間に可笑の資料を求めたものがこの種の狂言となつた。

布施無經 宗論 呂蓮 宗八 骨皮 泣尼 どちらぐれ 小傘 六人僧
飛越

女物

六は女物、言ひかへれば夫婦物で、琴瑟相和すべき筈の女夫が、家計不如意や嫉妬からの下

冠上で、女が男を痛めつける滑稽味を作曲したものである。

乙物

花子 金岡 因幡堂 鎌腹 石神 内沙汰 箕被 連雀 若和布 引くゝり
七は乙物、即ち戀愛の中に滑稽を見出したものである。乙はいとしの意の語で、斯道の用例に依つたのである。

盗人物

枕物狂 業平餅 釣針 岩橋 吹取 比丘貞 庵の梅 二十九十八
八は盗人物、強悪なもの、間にも、その性格に矛盾したところを持つてゐるものであるが、その點を誇張して描寫した所にこの種の曲が成立つ。但しこの中に、普通の盗人と題するものは、多くは一時の出来心から起つた窃盜で、可愛いとところのあるものとなつて居る。

花盗人 子盗人 連歌盗人 蜘蛛盗人 瓜盗人 牛盗人 盆山
盜を職業とするは特に山賊やまだちと稱するものである。

文山賊 女山賊 手負山賊

なほこの中に拘摸及びそれに似た詐僞手段の筋をも含める。

座頭物

擦過さつか 茶壺 長光 六地藏 金津地藏 佛師 太刀奪 磁石 成上者 二王
九は座頭物、盲目を笑の對照とするのは可なりに不道德な、文藝としても厭ふべき性質のもの

のであるが、盲人にはまた常人の心得ない機智を有するものである。それを誇張して寫したものはこの種の物である。

山伏物

清水座頭 蹴鞠座頭 猿座頭 茶麩座頭 不聞座頭 川上座頭 伯養 井礪いかり
十は山伏物、佛教の變體たる修驗道の行者は、一般に法力を以て尊敬せられた時代であるが、狂言作者はその裏面即ちその弱點を摘出して喜劇の材料としたものである。

冠者物

島山伏 柿山伏 蟹山伏 犬山伏 禰宜山伏 苞山伏 茵山伏いんぴら 腰祈 蝸牛
十一は冠者物、大名に仕へた剽輕な若者をば、太郎冠者次郎冠者など稱するので、その冠者の演ずる剽輕な所作言動を主眼としたものにこの名を負はせたのである。その冠者には、機智に富んで主人を翻弄するものもあり、臆病にして主人に翻弄されるものもあり、亂暴なもの、狡猾なもの、わるふざけをするものなど様々ある。江戸歌舞伎に猿若の狂言といふものはこの系統をひいたものである。

文藏 二千石 竹生嶋詣 富士松 鞍馬參 栗焼 鐘の音 痺 寢音曲
口眞似 杭か人か 樋の酒 附子ぶす 空腕 千鳥 清水 脱殻 鳴子
隠狸 木六駄

鬼物

十二は鬼物、まことの鬼では恐ろしくして狂言にはならない。これを童話的に扱ふので愛嬌があるのである。

首引 朝比奈

節分

鬼養子

政頼

餌差十王

寶箱取

矢尾

鬼槌 雷

仕舞物

十三は仕舞物、これは能の仕組にまがへて、滑稽な文句を連ねたものである。いはゞ嚴肅な能を狂言音曲で茶化した様な形がある。能の盛行の後に作り出されたものに違ない。

通圓 祐善

樂阿彌

蛸

野老

雙六僧

塗師平六

蟬

立衆物

十四は立衆物、他の狂言は大抵二人か三人の役者で行はるのであるが、これは賑やかに大勢を舞臺に立たせる種類の曲である。盗人物・祝言物などいふのは内容的の分類であるのに、これは單に形式的のものであるから、一列に分類するのは多少不合理たるを免れない。内容から見ては色々の種類のものが這入つて居る。

煎物 松脂

若菜

髯槽

老武者

歌仙

兒流鎗馬

千切木

關罪人

米市

雜

十五は雜、これには同類曲のないものを入れる。當代社會の反映として色々の事象が劇化されて居るのが面白い。財寶には有福な老翁に對する孫の情がうかゞはれ、舍弟には文盲な男を見、胸突には金錢の貸借が知られ、酢薑すじやうと膏藥煉かうやくには系圖を貴ぶ國民の思想が表され、寢代

構造

には破戒の僧、饅頭には行商人、伊呂波には親子藝の様子などが曝露されてある。以上は曲柄の主要な點に就いて加へた分類法であるが、見方によつては甲といふよりも乙に入れるがよいと考へらるゝものが幾らか無いとは限らない。けれども狂言の大體は此の如き有様のものと解しておいて大過はない。

狂言の構造 狂言は輕快な國民性の反映であると同時に、その構造の極めて簡單なる事も、淡泊なる國民性の正直な發露である。この點に於ては能の單純さよりも一層率直に民性を物語つて居るものと見てよい。前項種類の所に述べた立衆物を除いては、人物はいづれも二人三人だけで済むのが例となつて居る。舞臺はあの通りに四角い無裝飾の幕無しで、大道具も小道具も使用しないものであるから、事件は極めて簡單に運ばれ去る。この點は能と殆ど同様と云つてよい。

然してこの簡單な狂言には、脚色の上から見て、どんな區別が立てられるかと云ふに、劇の脚色は繁簡を通じて序破急の三段があるべき筈の所で、序即ち事件の展開と、破即ち事件の葛藤とは、各曲によつて趣を異にするが、急即ち歸結によつて大凡五様になつて居る。その第一はめでたく結ぶもので、祝言の性質を有する脇狂言及び百姓物にこの仕組のものが多し。勿論

一、祝言

その外のものにもある。

奏者「さあ〜これへ寄つて飲め、酌をしてやろ。シテアト二人「これは慮外でござります。奏「さあ〜めでたい和歌を歌うて立ちませい。シテ「畏つてござります。アト「誦「めでたやめでたやな。君の御壽命松もろ共に、千年の鶴の齡なれや。シテ誦「尙もめでたや〜な、金銀米錢御家督までも、ゆづり葉の君の、二人「ゆづり葉の君の、榮ゆる御代こそめでたけれ。(松様)シテ「扱も〜、これは思の外のことぢや。これと申すも天神の御納受であらう。この様なめでたい時には、謠をうたうて歸らう。アト「よからう。シテ誦「げにや和歌の言葉にも、鬼神までも納受とは、アト「かゝる事をや申すらん。二人「それ世の常のならひには、盗人を捕へては斬るこそ法ときくものを、この盗人はさはなくて、連歌に好ける徳により、シテ「太刀、アト「刀、二人「たびにけり。これかや事の譬にも、盗人に追ひといふことは、かゝる事をや申すらん〜。シテ「なう〜其方と身どもが命は、五百八十年、アト「七廻り、シテ「近頃めでたい。此方へおりやれ〜。アト「心得た〜。(盗人連歌)

二、破綻

第二には、前者が事件の圓滿に解決するのと反對に、これは葛藤の結果が終に破綻を見て、喧嘩になるといふ筋のものである。狂言の用語としては「やるまいぞ〜」というて、劣敗者或

は瞞された者が勝者或はだました者の跡を追うて舞臺を下るといふ事になつて居る。

三人「ざ〜んざあ〜。主「片輪者どもを留守においてござる。心許なうござる。急いで歸らうと存する。これは如何なこと、酒盛の聲がする。これはさて、座頭が目を明く、甍が立つ、甍が物いふ。さては賣僧の大盗人ぢや。やい〜。三人「そりや御歸りやつた。何とせう。甍「甍「お歸りなされましたか。座頭「わ〜。主「おのれは座頭であつたが、甍になり居つて、やるまいぞ。やあおのれも、甍であつたが座頭になつて、大盗人やらぬぞ。甍「あ〜許させられ。それなら膝行りませう。主「やあおのれは甍ぢやが、物ぬかしてゐざり居る。甍「わあ〜。主「まだ其のつれなことぬかす。大盗人どもやらぬぞ。甍「あ〜許させられ〜。主「やるまいぞ〜。(三人片輪)

狂言の脚色にはこの「やるまいぞ」式が一番に多い。狂言といへば直ぐにこの語を聯想せしむるのもこれが爲である。

三、落語

第三には、秀句に落して葛藤に解決を與へるものである。

僧「やい其處な者、如何ほどさういふとも、鹿を射たらば鹿にならいで叶ふまい。左近三郎「やい其處な坊、鹿を射て鹿になるならば、坊主を射て出家にならう。僧「射ることはなるま

いぞ。胸に三寸の彌陀があるぞ。三郎彌陀があらば割つて見よ。僧「待てしばし、『年ごとに咲くや吉野の山櫻、木を割りて見よ花のあるかは』と聞く時は、割つたりと花はあるまいぞ。三郎「いかにもある。僧「何處にある。三郎「目の前にある。これははなではないか。僧「何でもない事、とつとと行け。(鹿狩)

か様な言語上から生ずる滑稽味を以て話のまとまりを付けるといふことは、後世の落語の先驅となつたものである。

四、雜

第四はめでたく結ぶにもあらず、鬨争の破綻に終るでもなく、可笑味の言動をきつかけに打ち切りとなるものや、所謂無解決の手法を用ゐた様なものや、又は平板な叱責を以て、以後を嗜めと云つた様な結末となつて居るなど雜種のものである。可笑味の言動をきつかけにしたものの例は、早漆などに見ることが出来る。無解決の一例は梟山伏などに見られる。梟につかれた弟を連れて兄が、山伏の許へ来て祈禱を頼むので、山伏一所懸命に祈つたが少しも験が顯れない。弟は相變らず「ほん」と梟の鳴く様な聲を出す。その内に兄も「ほん」と言ひ出して來た。山伏は彌々祈をつゞけると、その仕舞には山伏まで「ほん、ほん」と言ひ出して來たのである。その先はどう落付くかを決せず曲が終るのであるが、これは狂言としては珍ら

しい脚色と云はなければならない。

五、能がかり

第五は能がかりのものである。謡曲の文を本體として之を滑稽な文句と、さら／＼とした狂言謡とで行くといふに止まり、内容に喜劇としての條件を備へたものではない。例へば通圓は能の頼政の文句を茶化したもの、双六僧は修羅物の眞似をしたが如きで、狂言としての價値の薄いものである。

正本

狂言の正本 舊猿樂の滑稽は當意即妙の言動にあつた。狂言の時代に入つても、初の間は正本などいふものが無く、大體の筋だけ立つて居れば、あとは出會ひ頭に獨白も對話も試みられたものであつたに違ない。それが鶯・大藏・和泉などの流派の生ずるに及んで、これが正本も出來、文句の異同も生ずる様になつたものに思はれる。今此等三流の正本を對照するに、鶯派と大藏流とは、可なりに文句の違はあるが、それでも文句に委曲を盡して居る趣のあるのは、古風を維持した點の多いによるべく、和泉流の簡明なのは、江戸時代の盛行につれて改竄の加へられた所が多い爲であらう。併し大體は室町時代民衆の口語をそのままに寫したものと見て間違はない。

狂言の正本は多く寫本として傳へられ、例の他見を許さず流に取扱はれたものもあるが、そ

の幾分は古くから刊本となつて發表された。寛文五年に輸入狂言記二冊の開板を見たのが一番に古いものであらう。けれどもこれは僅に十一番に過ぎなかつた。元祿十二年に至つて狂言記・續狂言記・拾遺狂言記各五冊づつ、各五十番の刊行を見、翌十三年に狂言記外篇五十番も續いて出版せられた。明治以後活字本として刊行されたものを擧ぐれば、

- 狂言全集 三卷 寺田露伴校
- 狂言二十番 一卷 名著文庫
- 狂言評註 一卷 大和田建樹
- 狂言全集 一卷 國民文庫刊行會
- 和泉流狂言大成 四卷 山脇和泉

なほ外に雑誌能樂に連載したのものもあるが、號數の記載は省略する。

狂言の文體 狂言の文章に就いて注意をすべき點は、謠曲は劇詩の域に進んでもなほ抒情と叙事との分子を多量に含んで居るのに反し、これは全然獨白と對話とだけから成立つて、その間に作者の感想や説明を加へた點が無いから、純粹な劇と云つてよいことである。而してその獨白や對話に用ゐられた詞は、當代民衆の口語で、謠曲の詞が當代上流者の口語であるのと違つて居る。

謠曲

- 「いかに誰かある。
- 「御前に候ふ。
- 「熊野來りてあらば此方へ申し候へ。
- 「畏つて候ふ。

狂言

- 「やい／＼太郎冠者あるか。
- 「はあ
- 「居たか
- 「御前に
- 「念なう早かつた。汝を喚出すこと別のこ
- とでない。明日さる方へ使にやるほどに、
- 一番鶏の唱ふ時分には必ず來い。
- 「畏つてござる。

かく形式が純劇的であり、用語が自在な當代口語から成つて居るといふことは、たとへ狂言自身は偏つた喜劇だけに畢つたとするも、後世に及んで複雑な多趣な劇文學に發達すべき可能性を有して居たものと認めなければならない。江戸時代の歌舞伎劇の發達はこの狂言の系統に出たものであつた。

今狂言の例として磁石を出す。これは寛正五年紀河原勸進猿樂の砌にも演じられた曲である

から、まづ狂言の中期のものに屬する。正本も比較的古風を存する大藏流のものによる。

アト「これは、遠江國見付の宿の者でござる。某未だ上方を見物致さぬに依つて、此度不圖思立つてござる。まづ、そろり／＼と參らう。誠に皆人の仰せらるゝは、若い時旅をせねば、年寄つての物語がないと仰せらるゝによつて、ふと思立つてござる。いや、參る程に國境へ出たが、これは何といふ國ぢや。はあ、これは三河の國と見えた。この三河國に八橋といふ名所がある。これを見物致さうか。いや／＼。これは戻りの事に致さう。誠に皆の者に咄いたならば、定めて上すまいと存じて、この度は某一人で上る事でござる。いや、又何かと申す中に國境へ參つた。やあ／＼。何と云ふぞ。是は尾張の國ぢや。扱も扱も、賑やかな國でござる。それ／＼、尾張の國には、熱田の明神といふ大社がある。これへ參らうか。いや／＼、これも戻りの事に致さう。とかく、まづ急いで都へ上り、爰かしこを見物致して、道すがら、名所は戻りに緩りと見うと存する。いや、又これは國境へ出た。これは何といふ國ぢや知らぬ。はあ、向うに青々と見ゆるは何ぢや。やあ／＼。あれは近江の湖ぢや。すれば近江の國ぢや。扱々、よい國でござる。いや、又こちらに夥しう人立があるが、あれは何事ぢや。や、何ぢや、坂本の市ぢや。いや、是こそ承り及うだ市ぢや。その上、程も近い

よつて、これへは參つて見物致さうと存する。扱も／＼、よい時分に通り掛つて、珍しい市立を見物致す事でござる。いや、參る程にはや市場ぢや。扱々夥しい事かな。あれからすつとあれまで、皆市立ちや。ちと見物致さう。シテ「これは、大津松本の邊を走り廻る、心も直ぐにない者でござる。今日は、坂本の市でござるによつて、あれへ參り、よささうな物もござらば、調儀致さうと存する。いや、これに田舎者と見えて、賣物に見入つて居る。ちと當つて見う。アト「これは如何な事、扱々都は油斷のならぬ。知らぬ者が詞をかくる、ちと所を替へよう。シテ「これは如何な事。眉合の延びた奴かと存じたれば、目の鞘の外れた奴でござる。今一度當つて見う。これは如何な事、どちへやら所を替へた。某も所を替へよう。アト「いや、其方は、最前から久しい／＼と仰有るが、身共が知る人ではおられないぞや。シテ「茲な人は、むざとした事をおしやる。知らぬ者が何と詞を掛くるものぢや。其方は、あのもの國の人ぢや。アト「ものゝ國といふ國があるものか。すれば眞實知つて居りやるか。シテ「中々、眞實知つて居る、有様に仰有れ。アト「夫ならば云はう。身共は、尾張の國の者でありや。シテ「おゝ夫々、尾張の國の人で有つた。アト「尾張の國には熱田の明神というて、大社がある。シテ「おゝあるとも。アト「その大社をつか／＼といひて伏拜む。シテも同じ様に伏拜むといふ。

アト「いや／＼拜みはせぬ／＼。シテ「誠に、拜みはせなんだ。アト「よう知つて居るの。シテ「中々知つて居るとも。アト「夫ならば、あり様を云はう。ツテ「有りやうを云はしめ。中畧。アト「眞實は、遠江の國見付の宿の者ぢや。シテ「誠に、遠江の國見付の宿の人であつた。アト「見付の宿は長い宿ぢや。シテ「成程、長い宿ぢやとも。アト「夫を眞直にいて、左へひちたをる。シテ「たをる。アト「いや／＼、左へひちたをらいで、右へきり／＼と廻れば、堀ほり廻いた大きな藪がある。シテ「おゝあるとも／＼。アト「その藪の中に、大きな家がある。シテ「誠に、大きな家がある。アト「其の家の内の者で、シテ「者で候。アト「いや／＼、其の内の者では無うて、その傍に小さな家がある。シテ「おゝ、あるとも／＼。アト「その小さい家の内の者で候。シテ「誠に、小さい家の内の人で有つた。アト「よう知つて居りやるの。シテ「中々、よう知つて居る。扱、其方の内、おゝ、アト「おゝ、おれう殿の事か。シテ「その御寮殿の事ぢやが、何と變らせらるゝ事はないか。アト「その御寮様まで知つて居るか。シテ「身共は、あの御寮様に抱き育てられた者ぢや。アト「すれば、其方の事であらう、都へ上らば言傳のしたい者があると仰せられた。シテ「夫は疑もない身共が事ぢやが、何と御息災か。アト「中々、變らせらるゝ事もおりない。シテ「さて其方は、今など上る人ではないが、何として上つた。アト「されば其の事ぢや

皆の者に云うたならば、上すまいと思つて、忍うで上る事でおりにやる。シテ「定めてさ様であらう。扱、これからどれへ行くぞ。アト「身共は都へ上る。シテ「何ぢや、都へ上る。アト「中々、シテ「夫は幸な事ぢや。身共も明日は都へ上る程に、同道致さう。アト「中々、同道致さうとも。シテ「この所に、石山の觀世音というて驗佛者があるが、お参りやつたか。アト「いや、まだ参らぬ。シテ「夫ならば、これは戻の事にさしめ。アト「戻りの事に致さう。シテ「今夜は、身共が定宿へ連れていて宿らせう。アト「何とぞ、とめてくれさしめ。シテ「さあ／＼、おりやれ／＼、アト「参る／＼。シテ「扱、其方は何ぞ用意召されたか。アト「路錢のたしに致さうと存じて、ほそ物を用意致した。シテ「夫は一段の事ぢや。茲は物騒な程に、泊へ着いたならば、某に預けさしめ。アト「何が扱、預けうとも。シテ「いや、何かといふ中に、是が定宿ぢや。つゝと通らしめ。アト「心得た。身共は殊の外草臥れた程に、最早臥せらう。シテ「これ／＼、洗足でも遣はぬか。湯も茶も厭か。是はいかな事、彼奴は旅勞に勞れたと見えて、正體がない。いや、なう／＼、宵の中身共は勝手へいて、亭主と咄いて居る程に、何ぞ用があらば仰有れや。扱も／＼、殊の外草臥れた體ぢや。なう／＼、御亭主、ござるか、ござりまするか。亭主「誰ぢや。シテ「私でござる。亭「我御寮の來るを待つてゐた。シテ「夫れはまた、如何様の事でござる。

亭「されば其の事ぢや。この間の者は、何の役に立たぬ程に、よい者があらば、取替へてくれさしめ。シテ「あれはよう使はるゝ者でござるがの。亭「いや、何の役に立たぬ者でおりやる。シテ「夫ならば、今日坂本の市でよい若い者をたらいで、即ち表の座敷へ連れて参つて、寝させて置きました。あれと替へて進せう。亭「夫と替へてくれさしめ。シテ「扱、明日は所用あつて都へ上りますが、鳥目二百疋入ります。六つ太鼓の時分、表を叩きませう程に、貸して下されい。亭「安い事、貸しておまさう。シテ「頼みますぞ。亭「心得た。シテ「なう、洗足でも遣はぬか。湯も茶もいやか。扱も、よう寝た。身共もこれに寝る程に、用があらば起さしめや。と云ひて番中合せにれる。アト、シテ亭主と咄すを立聞アト「なう、恐しするなり。シテ寝てからアトそつと起きて、扱足してや、人賣に出會うた。急いで参らうか。夜前身共を鳥目二百疋に賣付けた。之を取つて路錢の足しに致さうと存する。太鼓座へ行亭「心得た。そりや渡いた。と云うて亭主出アト「なう、嬉しや嬉しや。まんまと調儀致いた。いや、まだ餘り夜深な、不案内ぢやによつて、夜を明いて参らう。と云うて笛の上シテ「扱も、能う寝た、いや、六つ太鼓の時分ぢや。太鼓座へ亭「誰座へ着きて寝るぢや。シテ「夜前のお渡しやれ。亭「最前渡いた。シテ「いや、まだ受取らぬ。亭「いや、渡いた。シテ「ちと待たせられい。と云うて寝シテ「南無三寶、申し、夜前の奴が、して退きま

した。亭「やあ、夜前の奴がしてのいた。シテ「私は追掛けませう。亭「いや、最前から最早間もある程に、追懸けたりとも、追付けはすまいぞ。シテ「まづ待たせられい。と云うてアト見らうてシテ「申し、彼奴が寝た跡をいらうて見ましたれば、まだ如來肌でござる程に、遠うは参るまいが、私は見させらるゝ通り、丸腰でござる。此方の腰の物を貸して下されい。亭「安い事、貸してやらう。夫に待たしめ。シテ「心得ました。亭「これは某が重代なれども、貸してやらう。シテ「これは忝うござる。シテ「跡をもよい様に黒めて下されい。亭「中々、くろめて置かう。シテ「頼みますぞ。亭「心得た。シテ「扱も、腹の立つ事ぢやと云ひながシテ「何所許へいた事ぢや知らぬ。アト「いや、漸々夜が明けた。急いで参らう。扱々、夜前は危い目に逢うてござる。と云うて、互シテ「やい、おのれは夜前の水破ではないか。アト「おのれこそ人賣なれ。シテ「何の人賣か。一打にしてやらう。太刀を抜きアト「あ、と云うて、口を開シテ「あ、と云うたりと、胴切にしてやらう。アト「あ、シテ「やい、汝何者なれば、某が打付ける太刀にあ、とは云ふぞ。アト「某をえ知らぬか。シテ「いや何共知らぬ。アト「是は唐と日本の潮界に、磁石山といふ山がある。其の山に住む磁石の精なるが、唐土の鐵を呑み盡し、日本へ渡り、鐵を呑まうと思ふ所に、夜前某を鳥目二百疋に賣付けたを、取つて呑うだれば、唐金で咽に

つまつた。今又汝が抜いた物を見れば、一銘抱へた物と見ゆる。夫を吞まう／＼と申うて、夫故あゝと云ふ事ぢや。シテ「おのれ如何に磁石の精なりとも、吞まれさへせば吞うで見をれ。空竹割にしてやらう。アト」あゝ。シテ「あゝと云うたりとも瓜割にしてやらう。アト」あゝ。シテ「これは如何な事。彼奴があゝと申せば、太刀の地肌がどみと致す。やい／＼。アト」何事ぢや。シテ「この太刀を斯う振上げた所は何とあるぞ。アト」夫を吞まう／＼と思うて、氣が晴々とする。シテ「氣が晴々とする。アト」中々。シテ「また斯う隠いては。アト」夫では、何とやら氣が遠うなる様な。シテ「夫ならば、斯う鞘にさいては、アト」おゝ、差いて呉れそ。シテ「夫は何故に。アト」某が一命が失する。シテ「何ぢや、一命が失する。アト」中々。シテ「いや、シテ」おのれを是まで追懸くも害せんが爲ぢや。鞘に差いて差殺すぞ。アト」おゝ、さいて呉れそ。シテ「さすぞ。アト」さすな。シテ「さすぞ。アト」差すな。シテ「そりやさいた。アト」廻りてシテはあ、又磁石がたらすよ。磁石々々と云うて、太刀の鋒にて突いて夫をいらうて見てこれは如何な事、誠に彼奴は空しうなつたと見えて、太刀の芝引が冷うなつた。扱々是は苦々しい事ぢや。この御政道正しい御代に、大津松本の邊で、若い者が二人して追ひつまくつ／＼したが、一人は仕留める、今一人は通すなとある時は、某が足の抜きやうがござらぬ。何と致さう。夫々、磁石

が存在の時分に、この太刀を好うでござるによつて、是を磁石が氏産神に手向け、再び蘇生致させうと存する。如何に磁石が氏産神も儘に聞き玉へ。元よりも、磁石が好むこの太刀を、釧二三寸抜き寛げ、磁石が枕元にとんと置き、活々の文を唱へ、磁石が上をあらへひらり、此方へひらり、ひらり／＼と閃めかし、やあ如何に磁石。アト「誰ぞや邊に音するは、シテ」古のたう／＼よ。アト「名を聞くだにも恨めしや、シテ」恨むも道理なり、實に恨むも道理なり。シテ妻る。この中にアトがつきめ遣るまいぞ。シテ「夫は切物、此方へおこせ。アト」何の切物、胴切にしてやらう。シテ「又磁石にたらされた。許いて呉れい／＼。アト」あの横着者、どちへ行くぞ、捕へてくれい。やるまいぞ／＼。

第七章 和歌 連歌 俳諧

和歌 鎌倉以後の和歌が、殆ど文學としての價值を失つて仕舞つたにもかゝらず、昔のままに歌詠みの盛に出たことは、頻々として勅選集の表れたことを以ても知ることが出來た。この大勢は室町時代に入つても變化を見ない。又その價值に就いても見直すべき何物をも見出さなかつた。この時代に成つた勅選集は次の六集で、これで勅選集の世に出でたものが古今集から廿一に及んだわけだが、勅選のことはこれで絶えてしまつたのである。

- 續後拾遺集 二十卷 藤原爲藤同爲定選 元享三年—正中二年
 - 風 雅 集 二十卷 花園院 御選 貞和二年(二〇〇六)
 - 新千載集 二十卷 藤原爲定選 延文四年(二〇一九)
 - 新拾遺集 二十卷 藤原爲明選 貞治三年(二〇二四)
 - 新後拾遺集 二十卷 藤原爲遠同爲重選 永和元年(二〇三五)
 - 新續古今集 二十卷 飛鳥井雅世選 永享十一年(二〇九九)
- つらく此等を通觀するに、その内容は模倣と繰返との外に清新な何物もなく、作者は依然と

廿一代集の最後

評古今の歌

和歌四天王

して堂上を中心とした人々に限られ、畢竟千篇一律の遊戯文字に過ぎなかつた有様は、各集の題名を見たゞけでも推知し得られよう。徒然草にも、近代歌道の衰へて來た事を云つて、「この頃の歌は、一ふしをかしく云ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに如何にぞや。言葉の外にあはれにけしき覺ゆるはなし。云々。歌の道のみ古に變らぬなどいふこともあれど、いさや、今も詠みあへる同じことは、歌枕も昔の人の詠めるは、更に同じものにあらず。やすくす直にして姿も清げに、あはれも深くおぼゆ」と評して居る。但し多數な平凡歌人の中に於て、比較的に優れたものとして當代の四天王など稱せられた者は、頓阿・兼好・淨辨・慶雲などであつた。

月宿る澤田の面にふす鴨の氷より立つ明方の空 頓阿
 手枕の野邊の草葉の霜枯に身は習はしの風の寒けさ 兼好
 湊江の氷に立てる蘆の葉に夕霜さやぎ浦風ぞ吹く 淨辨
 庵結ぶ山の裾野の夕雲雀揚るも落つる聲かとぞきく 慶雲

此等の歌によつて澤田の頓阿、手枕の兼好、蘆の葉の淨辨、裾野の慶雲といふ仇名が生じたといふ事であるが、か様な陳腐な歌が當代にそれほどまで珍重せられたといふ事實は、また以

頼阿

て斯道衰頹の状況を裏書するものと云ふことが出来よう。

頼阿 以上四人の中でも頼阿正應二―元中元は特に優れた歌人として重んじられた人である。彼は俗名は二階貞宗と云ひ、和歌を藤原爲世に受けた。廿四歳の時に出家して叡山に上り、後に淨土宗に歸し、高野那智相摸伊勢などを遍歴した様に見えて居る。貞治二年に二條爲明が勅を奉じて新拾遺集の選に當つたが、半にして病歿したので、頼阿が更に勅を蒙つて之を完成せしめたといふことである。彼の家集に草庵和歌集六卷、同續集二卷ある。二條家の正風と稱せられ、堂上の人々には非常に重くせられたものでその註釋書に梅月堂宣阿の草庵集蒙求二十卷、本居宣長の草庵集玉帯六卷がある程であるが、彼の主とする所は畢竟古今集以後の古歌を庶幾し、特に二條家の傳統を重んじて用語を選び新想を避け、平穩無難の作を宜しとするに於つたので、彼もまた決して天才的人ではなかつた。彼のすぐれた歌の二三を例する。

あしの葉に夜の雨きくみなど江の浪の枕をいかであかさむ

淋しさは思ひしまゝの宿ながらなほきゝわぶる軒の松風

戀ひ死なむ身こそ惜しけれ悔しともつれなき人の思ひしらすば

月はなほかすみて残る片岡のあしたの原に雉子なくなり

あけわたる雲間の星のさのみなど稀になり行く契なるらむ

歌學の著に愚問賢註一卷扶桑拾葉集一五、水蛙眼目一卷類從二、九六、井蛙抄二卷類從二、四六二などがある。就中愚問賢註は、二條良基が歌の心得を問へるに對して彼の答へた所を記したもので、當代に衰へ來つた二條家の和歌道を再興する基となつたものとさへ稱せられて居る。八十四歳の高齡を以て元中元年三月十一日に入寂した。

兼好

同代の歌人 彼と殆ど同年輩であつた吉田の兼好は、文に於ては遠く頼阿を凌駕するけれども、歌の上では恐らく彼に及ばなかつた。兼好法師集一卷類從二、六九何等の奇も何等の清も無い。散文の大家は必ずしも韻文に長ずるとは限らない。所謂長鞭馬腹に及ばずの類か。

今川了俊

同時代に有名な今川了俊正應二―元中元は歌も詠んだが、どちらかと云へば歌學者の方であつた。名は貞世、正四位下左京亮に至り、鎮西探題にも補せられた武人である。入道して了俊、又徳翁と稱した。晩年は遠州に閑居して九十六の長壽を保つた。兼好の書き散らした徒然草を整理して世に流布せしむる様にしたのは、實に彼の手柄であつた。彼の著に師説自見集二卷類從四、四六八、今川大雙紙二卷類從四、四六八、今川了俊書札禮一卷類從三、七〇三、嚴島詣日記一卷類從三、三三三、道ゆきぶり一卷同、言塵集七卷刊、難太平記一卷類從三、九八などあるが、その和歌に關した彼の意見、従つて當代

和歌思想の一斑を覗ふに足るべきものは、今川了俊和歌所之不審條々一卷一名今言抄、了俊辨要類從二九六抄一卷同、落書露顯一卷同などである。

今川了俊の門に僧正徹二〇四一―二二一九がある。字は清嚴、招月庵と號した。東福寺の書記であつたので徹書記と通稱された。又歌を冷泉爲尹にも學び、詠出するところは數萬を以て計へたといふが、不幸大部を草庵と共に焼失したので、現存するところは一萬一千餘首、家集草根集十五卷に收められてある。技巧を弄しないところにむしろ其の取柄があり、多作は一世を壓倒する勢であつたが、二條家の人々の猜を受けて新續古今集中にその詠を採入れられなかつたといふ。

いくつ寝て春ぞと人にとひし頃待遠なりし年ぞ戀しき

春といへど事ぞともなきあしたかな世にも仕へず世をもわたらず

古今傳授 少し後れて東常縁二〇六一―二二五四といふがある。美濃の人、足利氏に仕へて下野守となつたところから、世に東野州と稱されて居る。重代の武士でまた代々の歌人の系を引いて居り、一度徹書記に師事したこともあつたが、後去つて二條家の歌系を受けた堯孝法印二〇五一―二二一五の門に教を乞うた。彼の歌に關した著述に東野州聞書二卷、東野州消息一卷元中八―康正元

東常縁

僧正徹

古今傳授

類從一、東野州拾唾一卷がある。その説くところ、從來の歌道以外に何等の注意すべきものある四三を認めしめない。然るに却つて非文學的の一事の、この間に注意すべきものを有して居ることは、一般文化史上から見て興味のある事である、それは彼によつて所謂古今傳授といふ事が始められた事である。古今傳授といふのは、古今集の解義の口傳と、特にその中のある項目について切紙の秘密傳授とをなす事である。秘傳の項目といふのは三箇大事おがたまの木、めどの割三花、かばな草の三語の解鳥之大事稻負鳥、百千鳥、呼子鳥の解秘々「ほのく」の歌の解などである。この秘傳を受くる爲には門弟から師匠に神かけた誓紙を入れ、決して秘密を破るまじき由を申入るゝといふ式を行ふ事としたものである。何といふ愚なことであつたらうか。又文學上に一分の價值も寸毫の益するところも無かつた事は云ふに及ばぬ。蓋しか様な行事の生み出されたのは、毎度繰返して述べた時代思想の反映、文學的妄信の一現象に外ならない。唯一神道を妄説して三壇行事だの神道傳授などいふ事を偽作したと云はるゝト部兼俱は、丁度彼の先輩が若しくは同時代の神官であつた。

夫は兎に角に、古今傳授は當代の權威として信奉せられ、まづ之を傳へたものは種玉庵宗祇であつた。宗祇は之を三條西實隆に授けた。之を二條家の本流とし、實隆の子公條、公條の子實枝と傳へて次に細川藤孝に傳へた。藤孝は則ち後の幽齋で、戰國から徳川の初にかけて武人

の歌道に通じた人、彼が丹後田邊城に圍まれた時、二條家の歌學・古今集の秘訣が絶えようかとの恐により、後陽成院が勅使を以てその圍を解かしめられたといふのは、有名な話である。宗祇はまた一方に柴屋軒宗長二〇八―二一九二に傳へ、宗長之を牡丹花宵柏二〇八―二一九二に傳へたのを堺傳授と稱へる。宵柏が更に之を奈良の林宗二に傳へたものを奈良傳授と云ふ。これで古今傳授に三流あるといふわけであるが、要するに文學的の意味の極めて薄いもので、和歌の衰頹した時代の一種の病弊とでも云ふべきものであつた。

新葉集 年代の順はまた少しく前に逆上るが、今述べた様な二條家冷泉家の亞流の人達によつて作り成された勅選集の間に立つて、後龜山天皇の弘和元年二〇四一に、當時の南朝方の人々だけの歌を集めた新葉集二十卷國歌大觀が、宗良親王一九七―二〇四五の手によつて編せられた。親王は後醍醐天皇第八の皇子、幼い時分に出家をして尊澄法親王と申し、天台座主の職におはしたが、世の亂れについて其の渦中に投じ、具さに艱苦を嘗め盡されたのであつた。世に信濃宮また上野親王とも申す。官幣中社井伊谷宮靜岡縣引佐郡井伊谷村の祭神はこの親王に渡らせらるゝ。親王を始めこの集の作者たる人々は、平凡な生活を營んで机上の構想をのみ生命とした當代一般の歌人達とは違ひ、目のあたり世の辛酸を嘗め、少くとも落魄不遇有爲轉變の人生を深刻に味う

新葉集

た人々であつたから、歌集の體裁は他の選集と同じ様に四季戀神祇釋教などと傳統的な部門の立て方をして、月次な遊戯文字も試みないではなかつたが、なほ其等の間々に於て、自然に悲痛切實の思想が染み出て居ることは争はれない。これが本集の特色であつてまた本集の價値ある點である。

月前露といふ事をよませ給ひける

後醍醐天皇

影やどす月さへ今はなれにけり都にかはる袖の白露

建武二年うへのをのことも題を探りて千首の歌つかへまつりける

ついでに

身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心の治め難さを

吉野の行宮にて五月雨晴れ間なかりける頃雨師の社へ山雨の奉幣

使などたてられける頃おぼしめしつづけさせ給ひける

この里は丹生の川上程近し祈らば晴れよ五月雨の空

懷舊の心を

物思はで過ぎぬる方の年月はいかにねし夜の夢にかあるらむ

題しらす

後村上院

鳥の音に驚かされて曉の寢覺しづかに世をおもふかな

妙光寺内大臣一周忌の佛事しける時つかはされける

世の爲もあらましかばと思ふにぞいとど涙の數はそひける

寄日述懷をよませ給ひける

曇らじと思ふ心よ同じくばはや日の本の光ともなれ

花挿頭といふ事をよませ給うける

御製

治らぬ世の人事のしげければ櫻かざして暮す日もなし

千首歌よませ給うける時石清水を

何とかく濁り行く世ぞ石清水人の國とは神もおもはじ

題しらす

中務卿尊良親王

かくばかり世はうち川の早き瀬に暫しも月のいかですむらむ

身はかくて沈みはつとも和歌の浦に名をだに照せ秋の夜の月

打ち靡く窓の吳竹とにかくに世の憂きふしのしげき頃かな

東の方に久しく侍りてひたすら武士の道にのみ携はりつゝ征東將
軍の宣旨など下されしも思の外なるやうに覺えてよみ侍りし

中務卿宗良親王

思ひきや手もふれざりし梓弓起き臥しわが身馴れむものとは

同じ頃武藏國へうち越えてこてさし原といふ所におりゐて手分な

どして侍りし頃いさみあるべきよし兵共にめし仰せ侍りしついで

に思ひつゞけ侍りし

君の爲世の爲何か惜しからむ捨てゝかひある命なりせば

元弘二年三月遠き方に赴かむ事もたゞ今日明日ばかりになり侍り

しに雨さへふりくらしていと心ぼそさもたぐひなく覺え侍りし

かば

うき程はさのみ涙のあらばこそ我が袖ぬらせよその村雨

野宮に久しく侍りける頃夢の告ありて大神宮へ百首の歌よみて奉

りける中に

祥子内親王

五十鈴川たのむ心は濁らぬをなど渡る瀬のなほよどむらむ

題しらす

山の端になほ入りやらでつれなくも憂世の中にあり明の月
吳竹のうき節々の積りしぞ世を反くべきはじめなりけり

滔々たる和歌の平凡な流に、新葉集は僅な波瀾を興へたとは云ふものゝ、畢竟和歌は文學として行詰りに詰つたといふ有様になつたのである。一般藝壇に於ては猿樂能を發達させ、狂言の喜劇を盛行させた國民は、この傳統的桎梏の中にある和歌道に關しても、茲から方向を轉換さして、何か新しいものを要求しようとするの機運に向はざるを得なかつた。この要求に應じたものは連歌の流行である。

連歌
起源

連歌とは一首の歌を二人して詠む戯である。若しこれを一つの題目について二人が構想して連絡を計るといふ意味に取るならば、神代以來の問答の歌、贈答の歌などがこの起源と見ることが出来るであらう。昔の人達は、日本武尊が東征の砌、常陸からすつと甲斐まで御越しになつて、酒折宮といふにおはしての歌

邇比婆理都久波袁須疑且伊久用加泥都流

とあつたに對し、乗燭の老人がその御歌に續けて

迦賀那倍且用邇波許許能用比邇波登袁加袁

と答へまつたと云ふのを起源であるとし、連歌をば筑波の道など云つたものである。けれどもこれは五七七の歌體即ち片歌の問答であつて、二人して一首を完成したものとは云へない。二人して一首の歌を詠み成したものの初は、萬葉集第九の

尼作三頭句并大伴宿禰家持所詠尼續三末句等和歌一首

佐保川の水をせき上げて殖えし田を

尼作

茹る早飯は獨なるべし

家持續

とあるものであらう。平安朝に入つては伊勢物語・大和物語にもこの戲が見えて居り、拾遺集にも

さ夜ふけて今はねふたくなりけり

天曆御門

夢に逢ふべき人やまつらむ

しげの内侍

と云ふ様な歌が見えて居る。それが連歌といふ名稱の表れ始めたのは、院政時代の金葉集からで、集の最後に連歌といふ部を設けて廿首を載せて居る。

連歌の名
の初見

ゐたりける所の北の方に聲なまりたる人のものいひけるを聞きて

あづま人の聲こそ北に聞ゆなれ

永成法師

みちの國よりこしにやあるらむ

律師慶範

もゝ園の花をみて

桃園の花こそさきにけれ

頼經法師

梅津の梅は散りやしぬらむ

公資朝臣

宇治へまかりける路にて日頃雨のふりければ水の出でて賀茂川を

男の袴をぬぎて手にさゝげて渡るをみて

賀茂川をつる脛にても渡るかな

頼綱朝臣

かりばかまをばをしと思ひて

信綱

かくの如く所詮は歌人の戯に過ぎないものであるから、その内容も形式も共に文學として稱讃するほどの價值あるものでは無かつた。これが鎌倉時代になると、支那の詩の聯句に倣つて、相續いで幾句をも連ねて行く、所謂五十韻の百韻のといふ長い連歌の作り方も始められ、漢詩の五十韻と云ふは百句、百韻といふは二百句なれど、連歌にては百韻は百句、五十韻は五十句とす(筑波問答、連歌辨義)遂に後世の俳諧に發達する基となつた。さり

長連歌

ながら鎌倉時代までは、やはり連歌を以て眞面目な文學者の事業とは信せず、單に和歌の餘興位にしか思つて居なかつた。一條兼良の小夜のねざめに、「爲家卿も齡長けては、歌案じつゞくもむづかして、朝夕連歌のみぞせられる」と見え、八雲御抄にも、「大かた連歌は、いたく風情を盡す歌の様にはなけれども、よき程に人に案せさせて作るはよき事なり。秘藏の詞などは付くべからず」とも云はれて居るのを以つて見ると、大抵當代の連歌の文學的位置が推量せられる。

かゞみの山の月ぞさやけき

鴉照るやにほのさゝ波うつり來て

家隆

さゝ竹の大宮人のかり衣

ひと夜は明けぬ花の下ぶし

定家

たえぬ煙とたちのぼるかな

春はまだ淺間のたけのうす霞

爲家

然るに鎌倉の末には、歌道が彌々衰へて來ると共に、師範家の拘束が益々やかましくなつて來たので、その煩に堪へない輩は、段々簡易に弄べる連歌の方に心を傾ける様になり、和歌の

宗家でありながら、心易い文戯をこの方面に試るものが相ついで表れて來た。冷泉爲相・二條爲世・同爲藤など云ふ歴々は、思ひ／＼に式目などを定めて賞翫した由は筑波問答に見えて居る。又同書に、「歌の道は秘事口傳も有るらむ、連歌は本より古のもやう定れる事なれば、たゞ當座の感を催さむぞ興はあるべき。わづらはしくこわばり聞きにくからむ事、ゆめ／＼用の給ふべからず」と云つてあるなどから推して、はゞこの頃の和歌に對して連歌のありし様がかがはれる。この頃に和歌を以て一身を連歌修行に委ねたものとしては、まづ善阿、及びその弟子達を擧げねばなるまい。心敬の比登理言に、「應長の比ほひより善阿法師といへるもの盛にめてはやし、彼が門弟に救濟・順覺法師・信照法師・十佛法師・良阿などとして侍りし」と。就中救濟は九十五まで長壽を保つたので、その門下にも知名の連歌師が出た。周阿は最もすぐれた一人であつた。

連歌師

あは雪は春のしるしに消えそめて

うすきけぶりは草の下萌

おもふほどにはいまだうらみず

風かよふなつ野の眞葛若葉にて

善阿

同

つみもむくいもさもあらばあれ

月残る狩場の雪の朝ぼらけ

風の音まで寒き夕暮

秋はたゞ人を待つにもうきものを

かぞふばかりに露むすぶなり

春雨にもゆるわらびの手を折りて

くゆる心に罪やきゆらむ

身を捨つる柴の庵の夕げふり

川のよどみに花を残れる

みよし野の夏みるまでの遅櫻

いつはり多き筆の跡かな

繪にかけば花も紅葉もときはにて

うつゝか夢かあけてこそ見め

旅にもつ荷前の宮根宇津の山

救濟

同

順覺

信照

十佛

良阿

周阿

弓矢ぞ國のをさめなりける
かゞし立つ秋の山田をかり上げて

同

南北朝の中頃に、時の關白であり歌道の宗家である二條良基一九八〇—二〇四八元應二—元中五五八—六三へも、救濟を師として連歌を學び、延文元年に菟玖波集といふ連歌の集二十卷を選んで、勅選集に准せられ、應安五年にはまた古來の式目類を潤刪して連歌新式追加を作つた。蓋し連歌發達の勢を助長するに力あつたものに相違ない。

應永の頃から世に聞えた人々の中には、今川了俊・成阿法師・梵燈庵主などがあつた。ついで塔能の連歌師と稱せられたものには宗砌・智蘊・心敬などがあつた。就中心敬叡山十住心院權大僧都 文明七年寂この道の宗匠で、その著にさゞめごと二卷類從三、〇四、老乃久理言一卷類從三、〇五、比登理言一卷類從三、四九七がある。

山かげたどる嵯峨の古道

人かへるゆふべの寺に鐘なりて

宗砌

まつとせし間に世をやつくさむ

花さかぬ若木の春に身は老いて

同

心敬

二條良基

手枕わたる窓の山風

春の夜や夢路も花に匂ふらむ

同

かたるも聞くも思ひでぞなき

いたづらに春秋暮す片田舎

智蘊

軒のしづくや松が根の露

葛の葉にむら雨かゝる庵ふりて

同

心に契る行末の春

身のあらばとばかり花の散るを見て

心敬

なかば過ぎ行く春のかなしさ

朝なくわれて霞める空の月

同

夢うつゝともわかぬ曙

月に散る花はこの世のものならで

同

ついで猪苗代兼載と飯尾宗祇とがある。兼載は心敬の弟子で、その著に心敬法印庭訓一卷續類從、四九七、若草山一卷類從三、〇六、連歌本式一卷類從三、〇六がある。宗祇二〇八一—二一六二應永二—八—文應二は紀伊の人、もとは

兼載
宗祇

武士で和歌にも嗜あり、通世して諸國を行脚し、普く天下に足跡を印したといふ。種玉庵、不審齋、自然齋、外見齋などの號がある。古今傳授を東常縁に受けた由は前に述べて置いた。連歌をば兼載に學び、刻苦その堂奥を究め、朝廷から花の下の號を賜はつた。彼の連歌の選に新菟玖波集二十卷續々類從第十五がある。上は御製を始め堂上から、下は先輩同僚自己のものまでを收めて居る。作法諸式について書いたものに吾妻問答一卷類從三〇三があり、評論に及んだものに老のすさみ一卷類從三〇五がある。

ながるゝ水の音の寒けさ

そことなくあかつき月に宿出でて

まちて心をつくす川舟

月更くる淀のわたりのほとゝぎす

わか葉はさらになよ竹のかけ

今朝みれば夜ながき雨に花もなし

人の身や生まるゝたびにうからまし

花にて知りぬ世々の春風

兼載

同

同

宗祇

いつしか淋し奈良の故里
柳ちる佐保の河風けさ吹きて

同

「おのづからなることはりを見よ」といふ句に
人々あまたつけ侍りし時

宿すとも水は思はぬ月すみて

同

連歌と和歌思想

連歌は本来和歌の不自由から免れて、自己の別天地をこゝに見出した性質のものであるが、尙和歌崇拜の時代思想をば全然振ひ落すといふまでには至り得なかつた。當時の連歌者流にも勿論新派と舊派とがあつて、新派は舊派を評して歌連歌と稱した様な風もあつたが、それも云はゞ比較的の差に過ぎないので、近古通有の傳統思想からどの位解放されて居たかは疑はしいものである。宗祇の吾妻問答に、宗祇が正徹から歌道の深旨を學んで之を連歌に用捨したと云ふことを、いかにも尤もなことを稱讚して居るほどである。また連歌はその特色として發句と附句との互の間に附かず離れざる體の趣を味とすべき筈のものであるのに、「うらか表か衣ともなし」と云ふ下句に對して宗祇が、「しのゝめのあしたの山のうす霞」と上句を付けたのや、又「我が故郷と鳥ぞさへづる」に對して心敬が、「誰が植ゑし木末の野邊に霞むらむ」と付けたのを

ば、宗祇は「能く叶ひ侍る、其のさま面白く又あはれにや」と褒めて居る老のすけれども、奇警なる見立て、むしろ戯れと云ふ以外に、一首の趣味として掬すべき何物をも見出し得ない。畢竟是までの連歌は窮屈な歌道の束縛から脱して、やれやれと脊伸びをした程度のもので、自然や人事の内に別段な新しい詩美を見出したものでもなければ、用語として従來の和歌と何等擇む所があるのでもなかつた。

然るに茲に注意すべきは、文學としてよりはむしろ遊戯として成長した連歌の性質からして、その勝負に物を賭けるといふ事が伴つて行はれたことである。鎌倉の初からこの事が見えて居り明月記、後鳥羽院建保三年の頃には、「有_三柿下栗下連歌興_二以_レ錢爲_三懸物_一」といふことが看聞日記に引かれてある。徒然草に見えた猫又法師の話は皆人の知るところである。甚しきは砂金領地などを賭物とした事もあつた様子で、今川了俊の如き、「歌には金づくの歌はなきものを」と嘆じたほどであつた。後世の懸賞點取の風は之と相去ること遠きものではない。けれどもこの没趣味な随伴物は、連歌の盛行を促して、之を俗間に普及させるのに大なる助となつたことは疑ない。建武二年の二條河原の落書に、「事新しき風情なく、京鎌倉をこきませて、一座揃はぬえせ連歌、點者にならぬ人ぞなき」と、誰も彼も之にたづさはつた様が見える。

賭物流行

俳諧

俳諧の連歌

宗長

俳諧 古今和歌集の序に、「それ歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」と紀貫之の云つた事は、古今を通じて異存の無い事であるのに、近古以後の歌は思ふ心を種として、そのまゝ言ひ出し得ないものに束縛されて居たのである。或は歌人といふ側の人々には、心にも自由を許されなかつたと云つてもよかつた。けれども人は自然の兒であるから、當代大多數の人に取つては、何等かの方法を以て言ひ表して見たいと思ふ色々の心の種が動いて居たに相違ない。これをば私に言ひ出して見たものが連歌の内容であり、この趣を更に徹底せしめた所に俳諧の連歌といふものが成立つた。誹論に「人皇百四代後土御門院御宇明應年中宗祇法師云々。ある人の所望によりて俳諧の百韻をなせり。是は俳諧連歌の鼻祖なるべき」と云つて居る様に、かの連歌師の宗祇を先驅者としたものであるが、その特色を明らかにしたのはその門人宗長二〇八―二一九二文安五―享祿五に至つてからである。

一體和歌は眞面目なもので、限られた思想の範圍内だけに作出せられるものであるから、古典的な上品な言語だけでも言ひ表すのに不自由はない。連歌に至つてもまづその性質のものと見てよろしいが、若し時代民衆の一傾向として表れ來つた輕快趣味、洒落思想を忠實に言ひ表して見ようとするには、勢として俗語即ち當代思想に即した口語をも使用しなくてはなら

ない。俗語の碎けた響は、和歌連歌の眞面目な詩形には不似合なものである。この不似合といふ事それ自身も、軽快な滑稽味を感せしめる一因となるものである。眞面目な和歌連歌から出た初期の俳諧は、かくの如くにして軽い滑稽な諧謔味を表したものであつた。嬉遊笑覽に、「俳諧と連歌は猿樂の能と狂言の如し」と比較して居るが、時代思想の關係から見れば、この評言が蓋し妥當なものと云つてよい。宗祇が近所に難産のあつた時、「摩訶般若はらみ女の奇特かな」と發句したに對し、宗長が「一二も濟んで産の紐とく」と附けたといふ話、よくこの趣を示して居る。

俳と誹

因にいふ。俳諧はたはむれごとの意である。古今集の中に誹諧歌といふ滑稽めいた歌を出して居るが、誹の字は俳の字の方が穩やかだといふので、この道に於ては常に俳諧と用ゐる習になつて居る。獨語。俳諧。獨稽古。

宗鑑

宗長について表れたのは山崎宗鑑と荒木田守武とである。宗鑑二二五―二二二正五―二二二は本名支那範重一説、通稱彌三郎、近江の人で、足利義尙に仕へたが、世を厭うて隱遁の後に一休禪師に侍したと云はれて居る。後に山城の山崎に住したによつて山崎と稱した。洒落な天性は俳諧の連歌に適し、永正十一年に犬筑波集一卷を著して旗幟を鮮明にした。

守武

守武二二三―二二〇九は伊勢内宮の神官藪田守秀の九男、正四位上、一福宜に至る。彼が「世の中」といふ語を上置いて詠んだ百首の教訓歌、世の中百首といふのは伊勢論語とも云はれて有名なものである。俳諧の作には天文九年に試みた荒木田守武句集一名守武千句、類從四九一がある。數日にして獨吟につゞけたものといふことである。

何やらむ踏みつぶしたる音はして

喰ひつくほどに思ほゆるみち

梢よりきてこそほゆれ犬櫻

猿まなこにて花を見る頃

佐保姫やはれ打出でさけぶらむ

人はさら〜かすが野の春

山吹の花そめ衣かきあげて

桃咲くころはもも見えつゝ

西王母いかばかりかはかゆからむ

湯をもあびざる秋はきにけり
三日月も盪もわるゝ夕にて

毘沙門堂は露の蓬生
花ざかり昨日か今日のきりふす

時うつるなりいかほども鳴け

手法

此等の俳諧を見ると、その特色とする所は、まづ連歌の本色たる附合の機智を尙ぶにあることは勿論であるが、一附合が内容からではなくして形式的に詞を辿つてせられて居ること。「踏みつぶす」と「喰ひつく」、「犬櫻」と「猿まなこ」などの類である。二而してこれを遣るに俗語を以てすること。「猿まなこ」「かゆからむ」などの類である。三 舊い和歌と同じ様に縁語・懸詞などに興味を持つて居ること。人はさら／＼かすかを春日に懸け、桃を股に懸け、或は思ほゆるから吠ゆる犬を思ひ付き、桃から西王母を黠出するなどの類である。此等を俳諧の特色と云ふよりは、當代の俳諧は俗語使用といふより外に、まだ從來の和歌連歌の臭味から脱却し得なかつたと云ふ方が適當かも知れない。

發句

發句 連歌はまづ一人が和歌のま句若しくは上句を詠み出したのを題として、之に適當な次

連歌の發句

句を附け合はするものである。この最初の句を發句と云ひ、附句を脇句と稱する。それから三句四句とつゞけて最後の句をば舉句と呼ぶのである。さてこの發句―特に五七五の句―を詠み出すについて相當の想を練る事になれば、そのまゝ獨立した短詩が成立つ事になる。既に冷泉爲相の母阿佛尼が人々の所望にまかせ、時節を考慮して發句を作したといふ事であるから吾妻問答、發句獨立の機運は相當に古いものである。その後専門の連歌師になると、發句の作にも見るべきものがあつた。

染めあかで落葉にかゝる時雨かな 順 覺
しぐれつゝ松をも染むる紅葉かな 救 濟
風ゆるく花かうばしきあしたかな 滿 廣
花にそへおぼろ月夜のけさの雲 宗 砌
名を知らぬ小草はな咲く川邊かな 親 當
つくしに下り侍りし時

秋ふけぬ松の博多の沖つ風 宗 祇
都やは紅葉の庭に峯の雪 宗 長

俳諧の發句

宗祇の新選菟玖波集は發句の爲に二十卷の内最後の十八・十九の二卷を宛てがつて居るが、内容價値は別問題として、形式から見ればもう立派な獨立詩といふ事が出来る。これが俳諧の時代になると、また俳諧趣味の發句として、相當の特色あるものとなつて來たのである。

すゝれ猶鼻をかまんとかみな月

宗 鑑

寒くとも火になあたりそ雪佛

手をついて歌申しあぐる蛙かな

守 武

元日や神世のことも思はるゝ

落花枝にかへると見れば胡蝶かな

撫子や夏野のはらの落し種

第八章 五山文學

五山の由來

室町の文學を終るに際して、猶一つ附加へて置かねばならないことは、五山の文學といふものに就いてである。五山といふのは、支那の五山十刹——これは印度の五精舍十塔に模したものだといふ——に倣つて、禪宗特に臨濟宗の盛になつて來た鎌倉以來、わが國にも鎌倉と京都とに建てられた五つの官寺の稱である。この五山の順位は、建武元年の定には京都の建仁寺・東福寺・萬壽寺、鎌倉の建長寺・圓覺寺と列ね、南禪寺をばその上に位せしむるといふ様にも見えて居るが、その後この順位は屢變更せられ、至徳三年の定では、京都五山は天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺、鎌倉五山は建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺の順で、南禪寺がその上に位するといふ事になつて居る。室町時代に於ては、特に京都五山は朝廷并に武人の間に崇敬せられ、流石に公家を蔑にした下剋上の將軍さへ、禪僧の前には膝を屈するといふ有様であつた。蓋し宗教信仰の然らしめたところである。それ故に社會が紊れて學術がすたれ、戦亂相踵いで士庶塔に安んぜずといふ間にあつても、ひとり禪僧だけは天子公方の師表として閑靜な境域に悠遊し、保護と尊敬とによつて山門は金城鐵壁よりも固く、又當代の無學な社會にあつて

五山の勢

は、僧徒は實に政治の指導者でもあり、外交の祐筆でもあつた。例へば足利尊氏が天龍寺を建立するに當つて、勸化使を元に差遣したのを始め、後の戰國時代に及ぶまで、使節として彼地に渡つたものは皆この間の禪僧で、その數が十餘人の多きに及んで居る。まして私に彼に往返して文化を齎らした者に至つてはどの位あつたか知れない。

か様なわけでこの間には漢詩文を以て有名な人々が澤山に現れた。まづ漢詩に於ては雪村の岷峨集、絶海の蕉堅稿、天常の東歸集、別源の南遊東歸集などがあり、漢文に於ては虎關の濟北集、義堂の空華集、中巖の東海一漚集、得巖の東海瓊華集、岐陽の不二稿、彦龍の半陶稿の如きがある。學術沈滞の世にあつて珍らしいことと云はなければならぬ。また和歌に有名な正徹は東福寺の書記であつた。禪風高き一休宗純は大徳寺の管主であつた。猿樂能大成の偉人世阿彌の遺著を見ると、その藝術觀が多く禪語を以て表されて居る。金春禪竹は教を一休に受けたと云はれて居る。豊臣秀次が謠曲百番の文章の註釋を議せしめたのも、この五山の僧侶を中心として行つたものであつた。

併しながら、五山文學その物を以て直ちに國文學の光彩とする事は出來ない。何故となれば、漢詩漢文はいくら邦人の手に成つた物とはいへ、やはり支那文學の沙汰であつて、國民の一般

漢詩文

五山と國文學

に與り知る處のものでなかつたからである。五山文學は別に五山文學として、本邦漢文學史を飾るものと見るのが至當である。但しこの五山が、戰國亂離の間に於ても、幸にして圖書と學者とを保持し得たので、やがて文教の興隆せらるゝに至つた徳川氏の江戸時代に及んで、諸般の準備的基礎を成すことを得た點は、大に尊重しなければならぬ。

内容索引 (五十音順)

了	伊勢物語 註釋書 一六	伊勢論語 一忠 一六二	伊勢物語 註釋書 一六	伊勢大輔 註釋書 一六〇
	赤染衛門 一八	和泉式部 一八	伊勢物語 註釋書 一六	十六夜日記 註釋書 一六〇
	顯季 二五	和泉式部日記 二八	伊勢物語 註釋書 一六	阿禮 一六
	顯輔 二五	和泉流 二八	伊勢物語 註釋書 一六	阿禮 一六
	吾妻鏡 二五	犬筑波集 三〇	伊勢物語 註釋書 一六	阿禮 一六
	吾妻問答 二五	石清水物語 三〇	伊勢物語 註釋書 一六	阿禮 一六
	問狂言 二五	家隆 三二・三三	伊勢物語 註釋書 一六	阿禮 一六
	阿佛口傳 二五	今鏡 三三	伊勢物語 註釋書 一六	阿禮 一六
	阿佛尼 二五	今物語 三三	伊勢物語 註釋書 一六	阿禮 一六
	有家 二五	今樣歌 三三	伊勢物語 註釋書 一六	阿禮 一六
	蟻通の神に奉る和歌序 二五	讀む今樣 三三	伊勢物語 註釋書 一六	阿禮 一六
	イ	讀ふ今樣 三三	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	牛	因果思想 三三	伊勢物語 註釋書 一六	イ
		院政時代 三三	伊勢物語 註釋書 一六	イ
		印度思想 三三	伊勢物語 註釋書 一六	イ
			伊勢物語 註釋書 一六	イ
ウ	歌合 うたゝの記 二八	歌合 うたゝの記 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	歌物語 二八	宇治拾遺物語 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	宇治十帖 二八	宇治大納言物語 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	宇治拾遺物語 二八	氏文 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	宇治大納言物語 二八	宇津保物語 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	氏文 二八	註釋書 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	宇津保物語 二八	馬内侍 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	註釋書 二八	工	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	馬内侍 二八	工	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	工	榮華物語 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	榮華物語 二八	註釋書 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	註釋書 二八	諸曲(猿樂參照) 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	諸曲(猿樂參照) 二八	古抄 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	古抄 二八	現存曲數 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	現存曲數 二八	現行曲數 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	現行曲數 二八	文章 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	文章 二八	題材 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	題材 二八		伊勢物語 註釋書 一六	イ
オ	種類 悦目抄 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	悦目抄 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	繪巻物 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	宴曲 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	宴曲十七帖 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	歌體 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	順世思想 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	延年舞 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	起源 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	舞式 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	作者 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	老乃久理言 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	老のすさみ 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	櫻雲記 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	奥儀抄 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	憶良 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	落窪物語 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	註釋書 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	御伽草子 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ
	種類 御伽草子 二八	種類 御伽草子 二八	伊勢物語 註釋書 一六	イ

索引

思想 作者	四三三	語部 假名の發明	二七	救濟 舊事記	六三三・六四四	京都五山 玉葉	六六
大鏡	二六八	鎌倉五山 鎌倉時代の小説	二六	記紀の歌	二	清輔	三九
大藏流	六〇三・六〇七	鎌倉時代の思想	六六	義經記(ヨシツネキ)	二	貴嶺問答	二五三
大津皇子	五五	神代文字	二二	喜撰	二二	金葉集	三六六
大友皇子	五五	歌謡の起源	二二	歸命本願寺	三九	金葉集	三三
大堰川行幸和歌序	一〇五	歌論	二二	狂言	三九	金葉集	三三
音阿彌	五三	觀阿彌	二二	狂言記	三九	金玉集	三三
海道記	五九	出世	二二	慶雲	三九	公任	一八〇・一九二
懷風藻	五八・七	藝術	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	空海	一〇九
談談の起源	四九	創作	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	愚管抄	一〇九
江談抄	二八	演奏曲目	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	曲舞	一〇九
學前院	九	勸學院	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	曲舞節	一〇九
神樂歌	一六・五七	閑居友	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	宮内卿	一〇九
註釋書	一〇〇	閑吟集	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	愚問賢註	一〇九
蜻蛉日記	一五二	勸進田樂	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	愚問賢註	一〇九
註釋書	一五	喜阿(龜阿)	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	愚問賢註	一〇九
假字本末	二二・二七	喜阿(龜阿)	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	愚問賢註	一〇九
風につれなき物語	三〇〇	喜阿(龜阿)	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	愚問賢註	一〇九
片假名	二二	喜阿(龜阿)	二二	慶雲(キヤウワン)	三九	愚問賢註	一〇九

カクワ

キ

ク

ケ

玄々集	六〇一・六〇三	小歌 種類	四二	修辭 思想	二二	小町	二二・二九
源氏物語	一〇一	内容	四二	研究書	二二	後村上院	六四
作者	二〇二	歌體	四二	古今集序	二二	古語集	一九
年代	二〇三	弘文院	四二	古今集序	二二	古來風體抄	二二
題名	二〇四	弘法大師	四二	古今集序	二二	語路	二二
卷數	二〇四	幸若舞	四二	國民の固有思想	二二	今昔物語	二二
前篇	二〇四	起源	四二	昔の衣	二二	註釋書	二二
後篇	二〇五	分派	四二	古語拾遺	二二	今春座	二二
作意諸説	二〇	曲數	四二	古語拾遺	二二	今春座	二二
理想	二二	作者	四二	五山文學	二二	今春座	二二
研究書	二二	文體	四二	古事記	二二	今春座	二二
紫式部といふ名	二二	流行	四二	註釋書	二二	今春座	二二
源語以前の小説	二二	古京の六宗	四二	古事記	二二	今春座	二二
元久法語	二二	流布本	四二	註釋書	二二	今春座	二二
兼好	四三・六三九・六四一	古寫本	四二	註釋書	二二	今春座	二二
兼載	六五・六六	部立	四二	註釋書	二二	今春座	二二
顯明	二二	歌數	四二	註釋書	二二	今春座	二二
遣唐使	一九	作者	四二	註釋書	二二	今春座	二二
源平盛衰記	三三	讀人しらすの歌	四二	註釋書	二二	今春座	二二

サ

鶯流	三十八	三十六歌仙	一五	修羅物	一六六
狭衣物語	三三	三十六人集	一八三	俊登	一六一
註釋書	三三	三代格式	二〇二	俊成(トシナリ)	一六一
さゝめこと	三三	三鳥之大事	一七九	順徳院	三二四
定家	三九六	三部假名鈔	三〇三	式子内親王	三三二
定頼	一八	散木奇歌集	三〇九	職人畫歌合	三三二
實方	一八		三〇	白拍子	三三三
實定	三八		三〇	新葉集	三三三
實頼	三三		三〇	心敬	三三三
更科日記	三三		三〇	新古今集	三三二
猿樂(エウキヨク参照)	三三		三〇	新古今調	三三二
樂師	三三		三〇	修辭法	三三二
樂座	三三		三〇	註釋書	三三二
藤風	三三		三〇	新後拾遺集	三三二
大成	三三		三〇	新後選集	三三二
本質	三三		三〇	新撰集	三三二
申樂成儀	三三		三〇	新撰姓氏錄	三三二
山槐記	三三		三〇	新撰覽波集	三三二
散樂	三三		三〇	新撰朗詠集	三三二
山家集	三三		三〇		
三箇之大事	三三		三〇		

新選和歌集	二六・二六	小説の起源	一五	異本	四六六
新古今集	六六	消息文學	四〇	曾我物語	四七〇
神代文字	三三	曾我	四〇	續古今集	三三
新勅選集	三三	説話文學	六六	續後拾遺集	六六
新萬葉集	三三	善阿	六三	續古事談	六九
新編御伽草子	三三	千載集	三三	續後選集	三三
神皇正統記	三三	選子内親王	一八〇	續詞花集	二五
註釋書	三三	撰集抄	三〇	續拾遺集	三三
神話傳説	三三	善竹(譯竹)	三〇	續千載集	三三
		創作曲目	三〇	續世繼	三三
		著書	三〇	續萬葉集	三三
轉親	一九	善風	三〇	曾丹集	一八
崇徳上皇	一九	宣命	三〇	大柏流	四九
住吉物語	一九	宣命書	三〇	火頭流	四九
			三〇	太古の歌謡	四九
世阿彌	一九		三〇	太古の宗教觀念	四九
著述目錄	一九		三〇	太古民の生活	四九
能の大成	一九		三〇	太古民の文化	四九
創作曲目	一九		三〇	太平記	四九
演藝曲目	一九		三〇	作者	四九
流調	一九		三〇		

東下り	四六六	修辭	四六六
平語との比較	四六六	講釋	四六六
研究書	四六六	台密	四六六
道教思想	四六六	道命	四六六
尊良親王	四六六	道命	四六六
箏	四六六	竹取物語	四六六
註釋書	四六六	多神思想	四六六
忠親	四六六	忠見	四六六
忠度	四六六	忠峯	四六六
忠見	四六六	旅人	四六六
爲家	四六六	親房	四六六
親房	四六六		

大學士 青木武助著

定價各八圓 送料各二十四錢

大日本歴史集成

菊判背革装
上中下三卷
三千五百頁

本書は、本文の各項に古今の典籍から考證に必要な引用を豊富に附して研究の便に資してありますから、本書一部を備へると、國史研究上實に數百卷の參考書を備へたと同様な便宜があります。本書は又、本文に出て來る人物の小傳を作つて附してありますから、事件の背景が徹底的に分ります。地名に對しても同様な注意を用ひて、今日の縣郡町村名を註記し、關係事實を詳細に記述してあります。これは他の歴史書にはないことで、學習上非常に便利であります。本書は又、史上の人物の作つた詩歌等は勿論、後世の人の手に成つたものをも収録し、時には狂詩狂歌等にも及び、又必要ある場合には謠曲淨瑠璃等からも採萃して、讀者をして乾燥無味の史實に倦ましめない工夫をしてあります。

文學士 青木武助著

定價各九圓 送料各二十四錢

續大日本歴史集成

菊判背革装函入
上下二卷三千頁

大日本歴史集成は、神代から筆を起して、徳川幕府の末期に終つてゐますが、本書はその後を承けて、幕末尊王論の勃興から現代に及び、我々に最も興味ある時代を、非常に面白く記述してあります。著述の體裁は、大日本歴史集成と同様であります。

大日本歴史集成 上巻 神代より平氏の滅亡まで

同 中巻 鎌倉幕府の初めより豊臣秀吉の薨去まで

同 下巻 關ヶ原の役より徳川幕府の末期まで

續大日本歴史集成 上巻 尊王論の勃興より戊辰の役まで

同 下巻 明治の新政より現今まで

櫻井時太郎著

定價各八圓 送料各二十四錢

東洋歴史集成

菊判背革装
上中下三卷
通卷三千頁

上下五千載、廣袤二百七十萬方里、かの西洋に對し、政治に宗教に、文學に哲學に、藝術に風俗に、截然とその國民性の特色を發揮せる東洋の史實を拾集し、廣く後世に影響を及ぼせる釋迦、孔子等の大聖は勿論、苟くも一國の盛衰興亡に關與せる人物、又は我國に大なる交渉を有する思想、學術、美術等の事項に至るまで、凡そ史家の研究に關する一切を網羅して、その變遷發達の跡を精叙せるもの、著者刻苦精勵、八ヶ年の努めの結晶にして、上中下三卷三千頁の大著である。教育者は固より、苟くも現下の世界及び支那に留意する諸賢の清鑑を乞ふこと切である。

角 田 政 治 著

定價 上卷六圓五十錢 下卷七圓五十錢 送料各二十四錢

最新世界地理集成

菊判洋布裝
上下二卷
一千七百頁

我國で一番詳しい世界地理書

歴史集成と同様に、本文に添ふるに澤山の参考記事を以てした點が特色です。我國で出版された世界地理書中最も詳細なもので、本書によつて文檢試験を突破した受験者は何千人とあります。

上卷は亞細亞洲及び太平洋州を、下卷は歐羅巴、阿弗利加、南北亞米利加の三大州を取扱ひ、寫眞版、原色版、地圖を澤山つけてあります。

文學士 鈴木 暢 幸 著

定價各五圓 送料各二十四錢

新 國 文 學 史

菊判洋布裝
上下二卷
一千五百頁

本書は上下二卷、合して一千五百頁、材料の豊富にして詳密なること、一貫せる國文學史としては、我國空前の大著である。而も叙述整然、論斷正鵠、加ふるに平明暢達の記事を以てして、行くとして些の倦怠を催さしむる所がない。蓋し國文學史の参考書として、最高の權威たるを誇るものである。

上卷 第一篇上古、第二篇奈良朝時代、第三篇平安朝時代、第四篇鎌倉幕府時代、第五篇室町幕府時代。

下卷 第六篇徳川幕府時代、第七篇明治大正時代。

東京高等師範學校 大塚講話會著

定價各二圓 送料各十二錢

實演お話集

四六判各四百頁
クロス上裝函入

本書は東京高等師範學校の先生方と生徒達が、心理や教育の方面から、お話の創作と仕方の研究を目的に組織して居る、大塚講話會の編著ですから、本書のお話は先づ第一に、何れも絶対に安心の出来るお話ばかりです。次ぎに本書のお話は、講話會の會員が、實地に何度も話して見て、よく練り上つたものを書き下したものですから、直ぐそのまゝ、お話に話すことが出来ます。普通の童話書は、話す爲に書いたものでありませんから、そうは行きません。のみならず本書のお話は、一つ／＼に仕方の上の詳しい注意が附してありますから、本書によれば誰でも上手にお話が出れます。第一卷尋常五六年向き、第二卷同上、第三卷尋常三四年向き、第四卷同上、第五卷尋常一二年向き、第六卷幼稚園向き、第七卷青年處女向き、第八卷同上、第九卷話方の研究。

370
23

終